.hack//G.U. Reunion

蒼雷のユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．　Ｒｅｕｎｉｏｎ

【Ｎコード】

Ｎ６６００Ｋ

【作者名】

蒼雷のユウ

【あらすじ】

西暦二〇一七年――――凶悪なコンピュータウィルス「ＡＩＤＡ」が引き起こした歴史上三回目電子災害――――第三次ネットワーククライシスの余波は、数多の世界分野に甚大な影響を与えた。原因の名前にちなみ、「ＡＩＤＡ事件」と名付けられたそれは、歴史にまた情報化社会の問題の一つとして刻まれた。

安全性を重点にバージョンアップを重ねた『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒ：２』で、一つのギルドが精気よく活動している。傭兵ギルド“スパイラル”、その創設メンバーであり、リアルで離れ離れにな

りネットで交流する三人の幼馴染、「エイン」「ガイヤ」「ナミ」。所属していた穏健派大ギルド“月の樹”の理念を一部受け継いでいる彼ら三人は、理不尽なＰＫと対峙、助けを求める声に応じてこの日も「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」で奔走し、冒険し、語り、アリーナに出場する。それはプレイヤーが誰しもとる彼らの遊び方だった。

だが、平和が訪れたかにみえたその世界に、新たなる脅威が押し寄せようとしていた。

これは、一人の放浪者によって世界が刷新し、再び世界への帰還を待ちわびる人々の中で、三人の人間とそれに関わる者達と共に、新たなる脅威と戦うことを運命付けられた、喜びと憎しみと愛と希望と絶望と悲しみ、そして贖罪と再会の物語である……

「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」の物語から数カ月後の秋で繰り広げられる、スペクタクルファンタジー。今、Ｒｅｕｎｉｏｎされる！

――あなたは叶えたい願いに、どんな犠牲でも払えますか――

Proroouge～プロローグ～（前書き）

※この物語は、ＰＳ２用ソフト「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」本編から数カ月後の世界が舞台です。初めて．ｈａｃｋの世界に触れる方の為に、随時解説を入れておりますが、物語の都合上、本編のネタばれ要素が入っています。．ｈａｃｋの世界をゲームで楽しみたいと考えている方は、ゲームを先にプレイするのをお勧めします。

また、この作品は過去某サイトで投稿したものを加筆修正、改稿したものです。（そのサイトの管理者から許可は得ています）

Prorouge～プロローグ～

Ｅｐｉｓｏｄｅ　？

プロローグ

二〇〇五年、クリスマス。

『冥王の口づけ（Ｐｌｕｔｏ Ｋｉｓｓ）』ウィルスがネットワーク上に流行し、既存のＯＳとセキュリティは崩壊した。キリストの誕生日前に冥王が舞い降りた事件、そしてネットワーク社会の黄昏の日。世界経済に天文学的規模の被害をもたらし、あらゆる生活、時代を二〇年巻き戻したといわれるネットワーク暗黒時代の悪夢。これを「Ｐｌｕｔｏ Ｋｉｓｓ」事件、後に第一次ネットワーククライシスと呼ばれた事件が発生した。この日を機にネットワークは一般閉鎖され、ネット利用制限が発令、人々は不自由な暮らしを余儀なくされた。

二年後、絶対の信頼性と『冥王の口づけ』ウィルスの影響を唯一受けなかったアルティメット社の「ＡＬＴＩＭＩＴ　ＯＳ」と共に再びネットが一般公開された。クリスマスイブ「聖母の口づけ」。そしてサイバーコネクト社によりサービス開始されたＭＭＯＲＰＧ『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』は、やがて二〇〇〇万人以上の有料アカウントユーザーを抱える世界最大のネットワークゲームに発展した。そして後にＣＣ社は娯楽コンテンツ産業の最大手として世に君臨し続けることになった。

だが、その聖母の見守りも長くは続かなかった。二〇一〇年、冬。再びネットのラグナロク、第二次ネットワーククライシスが発生し、世に甚大な被害をもたらした。

その後、二〇一五年末、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』はＲｅｕｎｉｏ

nした。続編である『Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ Ｒ：２』が発表されたのである。後初メーカーの乱立による市場の飽和、ＣＣ社の火災事故によってＲ：１のデータが抹消されたことなどで、ユーザー数こそ一二〇〇万人に減少したものの、評価はゆるぎないものとなっていた。

二〇一七年、夏。第三次ネットワーククライシスが発生し、その原因がＣＣ社の『Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ』であることが持ち上がった。ＣＣ社はあるプレイヤーを事件の首謀者と仕立て、ウィルスをばら撒いたという罪を擦り付け、自分の名誉を守ろうとした。しかし、内部告発により、それが公になることはなかった。結局、ネットワーククライシスの原因が『Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ』ではなく『ＡＩＤＡ』という知的ウィルスによって起こったことにより、名を『ＡＩＤＡ事件』と名づけ、「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」はお咎めなしということになった。

ＣＣ社の株価はこれを機に暴落、規模縮小し、他産業大手数社がＣＣ社買収の機会を狙おうと牽制しあっていた。

そして、二〇一七年、秋。人々は少し不自由な生活の中を懸命に生き、そしてＭＭＯＲＰＧの歴史がはじまって四半世紀。安全性を重点にバージョンアップを重ねた『Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ Ｒ：２』は、あらゆる賞賛と批判の中、変わらず人気を博していた……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

水の音が緩やかに聞こえ、音が反響する世界。

ここは「世界」の場の一つ、洞窟。
だが、それらはすべてサングラス型M2Dを介したデジタル、つまり虚構の世界だ。
MMORPG「The World R:2」が人気なのは、この虚構がリアルに勝るとも劣らぬ臨場感を出しているということだろう。
コントローラーを握った感触がプレイヤーを現実(リアル)と虚構(ネット)を認識し分ける。
ただ、それだけであった。

「うわあああああ!」

悲鳴が反響し、洞窟を駆け巡る。
ある所で、三人組が二十人あまりの集団に取り囲まれていた。
PC。プレイヤーキャラクター同士である。仲良く遊んでいた三人が不良のいでたちをしたプレイヤー達に絡まれている。
そして、三人の内、一人は灰色でその場に倒れていた。
不良のPCに倒されたのである。
このネットゲーム「The World R:2」には対人対戦PvPが仕様として容認されてからPCをキルする行為、Player Killer、通称PKが横行していた。第三次ネットワークライシスが起こった後は沈静化の傾向にあったが、やはり人間の感情はそうはいかないもので、感情の赴くままに行動する者は少なからずおり、世界には再びPKが目立ちつつあった。
彼らはその一部である。

「おい、てめえら……」

集団から二人の男が前に出た。
最近カオティックPK試験に合格し、カオティックPK———P

Ｋの中でも特に悪名高く、ＣＣ社によって公認、賞金首にされるほどのＰＫ――――になったばかりの邪骨兄弟、「イバク」と「ゲランゴ」である。

二人は奇妙な容姿である。兄のイバクは細身のピエロみたいな外見で後頭部から髪を生やし、全身に施してある独特のペインティングが特徴の魔導士（ウォーロック）。弟のゲランゴは体格がいいピエロの外見で後頭部に羽をつけ、兄と同じく独特のペインティングが特徴の斬刀士（ブレイド）である。

「さっき、レア度が高い素材手に入れただろ？　そいつをおとなしくよこしな。この俺様の魔術で火あぶりにされたくなければな。そうだな、ゲランゴ？」

「ヒ、ヒヒヒ……。兄者の言うとおりだ。兄者は強いんだぞ」

イバクは手から炎を具現化し、円の軌跡を描く。

ゲランゴは兄の意見に賛同するように口を合わせた。

「な、なんのアイテムですか？」

絡まれている一人、少年ＰＣはおどおどしながら尋ねた。

「とぼけるなよ。さっき上の階で宝箱から手に入れたろ、その素材をよ。ＳＰ（スペルポイント）封印の付加する素材だ。俺達はそれが欲しいんだ。さっさとよこしな」

それに合わせ、周囲のＰＫ達もアイテム出せと恫喝する。

「わ、わかりました……」

絡まれている少年ＰＣはビクビクと、恐怖しながらアイテムを差

し出す。
アイテムは任意で相手にトレード、プレゼントすることが可能だ。だが、その様子は他のＰＣのグラフィックには表示されないので、する相手とされる相手にしか分からない。
画面にＳＰ封印付加の素材を手に入れたことを確認したイバクは高笑いする。

「ははは。これでまたいい力が手に入った。これを使って前回の採用試験で邪魔してくれた憎き黒い錬装士（マルチウェポン）にリベンジができるぜ。ＳＰ封印してスキルトリガーを封印すれば、いくら奴でも弱音を吐くな！　なぁ、ゲランゴ？」
「その通りだぜ、兄者。フ、ヒヒヒ」

二人は勝ち誇ったように高笑いし続けた。その時に、少年ＰＣが口を開く。

「じゃ、じゃあ、渡したから、助けてくれますよね？」
「ああ、分かってる。俺達はお前をキルしねえ。約束だからな」

そう言って、イバクは踵（きびす）を返す。だが、こういう輩は素直に動じたりはしないものだ。

「おい、お前ら。後は好きにやっちまいな」

そう冷静に、冷酷に。

「っ……！」

少年ＰＣは声を失った。

「え、いいんですかい？　いやっほう！」

周りのＰＫたちは喝采した。

イバクはそれを見て口元を歪める。

「は、話が違うじゃないですか！　そのアイテムを渡したらキルしないって……！」

少年ＰＣは動揺したように反論する。だが、イバクは笑いながら振り返った。

「ああ、その通りだ。俺達はキルしねえ。だがな、残念ながらこの周りのＰＫどもは俺のパーティーメンバーでもなけりゃ、仲間でもねえ。ただの野次さ。俺はこのＰＫを含めておめえらをキルしないなんて一言も言ってないぜ！　それで倒されても文句言えないよなぁ。なあ、ゲランゴ？」

「その通りだぜ、兄者！　さっすが兄者だ、ヒヒヒ……頭いい！」

「なっ……！」

ＰＫたちはボイスチャットで失笑を重ねる。

これが、人間がむき出しにする悪意なのかと少年ＰＣは声を失った。

＊　＊　＊

その遠く離れたところにそれを見つめるＰＣがいた。

「うわぁ、ひどいなぁ。ああいうことを平気でいうなんてリアルの

性格がしれてるな。ようあんな台詞を言えるもんだ」男のＰＣが他人事のように呟いた。彼の発言はパーティーチャットで行っており、彼と共にパーティーを組んだ者達でしか、聞こえない。彼は、隣にいる別のＰＣに振り返る。「お前の一番嫌いなタイプだな、おい」

男ＰＣの隣には別の男ＰＣが立っていた。

「で、行くんだろ？　ああいうタイプはムカつくから」

「ああ。そうだな。……付いてきてくれるか？」

尋ねられた男ＰＣは最初のＰＣに相槌（あいづち）を打ち、訊ね返す。

「勿論」

最初の男ＰＣが頷いた。

隣にいたＰＣは背中から銃剣を取り出した。

＊　＊　＊

ＰＫたちは残る二人をどういたぶっていくか相談しているところであった。イバクとゲランゴは少し離れたところで立っている。

しばらくすると、あるＰＫがイバクに近づいた。

「イバクさん。『黄泉返りの薬』、余分に余ってませんか？　あったら譲ってほしいんっすけど」

「それはいいが……何に使うんだ？」

「それ使って、そこにいる妖扇士（ダンスマカブル）をいたぶってやろうと思いましてね……へへへ」

イバクは怯えている二人組に目を向けた。先ほどの少年型の斬刀士のＰＣ、その後ろには少女型の妖扇士がいた。
彼は、このＰＫが何をしたいかを察する。

「なるほど、ほらよ」

イバクは黄泉返りの薬をそのＰＫに渡した。
ＰＫは礼を言って、集団に戻っていく。
しばらくしてイバクは、二人組に近づき、静かに見下ろした。

「さて、そろそろ調理の時間だな。特に妖扇士のお前。お前を特にゆっくりと料理するようだ」

イバクはそう言いながら妖扇士の少女に目を向けると、彼女は「え……？」とイバクを恐る恐る見た。
いつの間にかＰＫたちが二人組のＰＣを囲み、臨戦体勢に入っていた。

「今から奴らがしようとしていることを教えよう。奴らは黄泉返りの薬をお前に使い切るつもりだ。地獄を見せるため……」

黄泉返りの薬はパーティーメンバー以外でも使う事は可能だ。黄泉返りの薬はＨＰ０になり敗れたＰＣを蘇生させるアイテム。これが可能なら例えＰＣがＰＣをＰＫしても、このアイテムを使えば誰でも蘇生できる。
すなわちこのＰＫ達はアイテムを使い切るまで妖扇士の少女をＰＫし、蘇生し、またＰＫするという繰り返しをするつもりなのだ、とイバク。
それを聞いた妖扇士の少女は恐怖で「ひっ……！」と小さな悲鳴

をあげた。
――――まさにその行為は彼女のプレイヤーの心をズタズタにする可能性がある行為だ。最悪の場合は再起不能になるほどにショックを受けてゲームをやめてしまう可能性がある。
悪意。なぜこんな悪意を持つプレイヤーがまだいるのか。
この「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」は全年齢向けゲームだ。いくらＰＫしても、血飛沫（ちしぶき）をあげることも、身体が真っ二つになるグロテスクな表現はない。ただ倒れて灰色表示の死体になるだけだ。そういうのは小さな子供や心臓に弱いお年寄りに十分配慮されている。
だが、交わされるプレイヤーの会話や行動に自主規制はない。
隣にいる少年ＰＣも意味を解して驚愕（きょうがく）していた。

「じゃあまずは、そっちのボクをやっちゃおうかしら？　意外にアタシのタイプだし」

いかにもオネエキャラのＰＫが前に出る。その手に武器を持って、少年ＰＣの前に立つ。

「まあ、これも社交辞令ってとこか？」
「ヒ、ヒヒヒ。だと思うよ兄者」

イバクとゲランゴは全く関与する気もないようで、雑談に入っていた。

「さあって、どう可愛がってあげようかしらん？」
オネエ拳術士（グラップラー）が金髪をゆらして、拳で少年ＰＣを嬲（なぶ）る。
「っ、助け……！」

少年ＰＣが叫ぼうとすると、オネエ拳術士が拳を高く振り上げた。

「じゃあね、ボク」

いよいよオネエ拳術士が拳を振るおうとしたとき、遠くから銃声が轟(とどろ)いた。遠くから発せられた一条の閃光はオネエ拳術士が声をあげる間もなく、体ごと持っていった。

「――――！？」

その光景にその場にいた全員が硬直した。

――――な、なにがあった……？

少年ＰＣは一体何が起こったのか分からない。前にいたＰＫが一瞬にして消し飛んだのだ。

ＰＫの一人が我に返り、閃光が飛んできた方向に振り向いた。

「なんだ、てめぇ――――」

次の瞬間、そのＰＫも閃光の餌食(えじき)となった。

二発目の銃声で全員が我に返り、一斉に応戦体勢に入る。

「何者だ！」

イバクも狼狽(ろうばい)しているのか、裏返った声のまま魔典を構える。

視界の先には銃剣を構えたＰＣと隣の赤髪男性ＰＣが立っている。

「ひでえな、そんないたぶり方、しようとするなんて随分久しぶりだな。今まで聞く機会なかったが、まだそんなことしてる奴、いたのか」

銃剣を持つＰＣの隣にいる男性ＰＣが、溜め息を吐き肩を竦めた。
男性ＰＣは赤い鎖帷子に茶色い半袖コート、金属のブーツを穿いたいかにも戦士系の井出達（いでたち）、短く切られた赤髪。陽気な雰囲気をしたＰＣだ。

「そういう奴はとことん粛清（しゅくせい）しなきゃな。な、エイン？」

エインと呼んだ赤髪のＰＣが隣に振り向く。
銃剣を持ったＰＣだ。青の長袖の服を身に包み、その上に黒いジャケットを羽織っている。ズボンは紺色のズボンで膝に小物を入れる小さな長方形の箱を付けている。長くも短くもない普通によくいる髪型の黒髪をしている。
二人とも日本高校生男子と同じ身長だった。
エインとよばれた黒髪のＰＣは眉をひそめ、ＰＫたちをゆっくりと視界に収める。

「エインだと？　まさか、『蒼雷（そうらい）のエイン』か！？」

ＰＫの一人がエインというＰＣに指を指して叫んだ。
その言葉に別のＰＫが尋ねた。

「『蒼雷のエイン』？　なんっすかそれ？」
「知らないのか？　ものすごく強い銃戦士（スチームガンナー）で、雷の銃撃を得意とする男の名だ！　あの現最強銃戦士、『クーン』に近い男の一人と呼ばれている」

雷属性は第三次ネットワーククライシスの後、大幅アップデートで新たに付け加えられた属性だ。素材アイテム「雷の磁球」を武器

にカスタマイズすれば雷攻撃が可能になるのだ。
蒼雷のエインの名はその頃に広まり始めていた。
赤髪のＰＣが驚いたように頷いた。

「お、よく知ってるな。こいつはエイン。そして俺はガイヤだ。元“月の樹”に所属していたんだ。よろしくな」
「月の樹だと！？」

ＰＫたちが月の樹と聞いて動揺が走った。
――“月の樹”とはギルドの名前だ。ギルドとは「Ｔｈｅ（この） Ｗｏｒｌｄ（世界）」内でプレイヤーが結成できるサークルのことだ。数人から数千人規模のものまである。目的もチャット仲間の集まりから、レア武器を融通しあうような実践的なもの、相場を操る商人組合ギルド、ＰＫ専門のグループまで存在している。
なかでも“月の樹”というのは指折りの大ギルドである。かつて、五〇〇〇人のメンバーを抱える“ケストレル”と同規模の存在であり、知名度も然り「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」の双璧といえるくらいだった。
ＰＫ専門の自由奔放主義“ケストレル”と平和主義を掲げＰＫ廃止を訴える“月の樹”は対立状態にあった。いわゆる治安維持ギルドであり、ＰＫを忌み嫌う者も多い。穏健派として知られていた。

「何故、月の樹の連中がこんなところに！」
「おいおい、元月の樹だ」

ＰＫが動揺で叫んだところでガイヤが訂正させる。

「そんなことはどうでもいい。なんでそんな奴がここにいるっ！？」

ＰＫは聞かん坊ばかりに声を張り上げた。

ガイヤは少し考えてからその質問に答える。

「いやな、俺たちはただの通りすがりの冒険中の冒険者さ。ここで面白い物があるって聞いて冒険の最中だったんだが、奥に騒がしい声が聞こえたんで見に行ってみたら、案の定ＰＫ集団と出くわしたってわけさ」

まるで、言い訳になってない子供の理由だが一応なっている、らしいと本人。

「聞いた、だと？　通報者がいたのか！？」

「さあ、どうかな？」

ガイヤはそう言って、大げさに肩を竦める。

「ふざけやが――――」

まだ声を張り上げようとするＰＫだったが、横からイバクが彼をおし止める。

「まあ、落ち着け。……で、元“月の樹”さんが何のようで？　まさか、ＰＫやめろとかそういう慈善団体じみた台詞を吐くつもりか？　あれだけの事件を起こしておきながら」イバクは考える仕草をすると、う～んとわざとらしく声を漏らす。そして思い出したかのようにモーションをした。「……そうそう、あの事件、自分達はＰＫ廃止とか言っておいて、実際お前達はＰＫやら改造やらに手を染めていたそうじゃないか？　それで月の樹は崩壊したんだろう？　嘆かわしいね」

「……」

ガイヤはその言葉に反論はしなかった。
事実。いや、本当は何も知らされていない部類に入るのだろうか。
――最近起こった悪質コンピュータウィルスが発生し、一時期プレイヤー達が幻覚状態に陥った事件――そのウィルスの名にちなみ名付けられたＡＩＤＡ事件の際、月の樹は崩壊した。理由は不明だが、内部闘争が起こり、エリア内が不正改造されていたことを受け、ＣＣ社から強制解散させられた。
噂であるが、当時、月の樹本部エリアはログアウト不能状態になり、エリアではＰＫが横行したそうだ、という。
この事件の首謀者は当時月の樹の部隊の一つ――大所帯の為に指示を円滑に送るため分隊制をとっていた――の二番隊隊長「榊（さかき）」というＰＣと、ある呪療士（ハーヴェスト）が引き起こしたとされている。
だが、目撃者の証言よると、呪療士のまわりに黒い泡のようなものがあり、それにＰＫされた者はＰＣが消滅したらしい。
原因は当時話題になっていた「ＡＩＤＡ」ウィルスという黒い泡のエフェクトだと指摘する者もいたが、結局はうやもやにされてしまったのだ。何分、現実での時間は約一分間という短時間であったため、事件性にすらされなかったのである。巻き込まれたプレイヤーの中に、実際長時間に感じられたと訴える者もいたが、黙殺されている。
「噂では今、月の樹の残党が再結成の機会を窺（うかが）っているとか。お前達はその一部かな？　そのためにＰＫを止めようとしている。それはいいことだが、人事ではないのでは？　本当はＰＫが好きでたまらない自己中さん？」
イバクの言葉で賛同するＰＫたち。
湧き上がる怒声の中、ガイヤは構わず口を開いた。
「まあ、できればＰＫはやめてもらいたいが、今はそれが目的じゃ

ない。俺達は―――」と、ガイヤは握り拳を作り、声を荒げた。「雇われ遊撃隊“スパイラル”だ」
「雇われ遊撃隊？」
「いわゆる傭兵（ようへい）みたいなもんさ。依頼を引き受けて報酬をもらう者達のこと。俺達はそれを今やってるわけだ。だからもうＰＫを止めることを促すことはしないさ」

ＰＫ達は彼の言っている意味が理解できずに動揺を隠せずにいた。
だが唯一、イバクは一瞬ハッとなり、眉を寄せた。

「まさか！？　ここに来たのはＰＫを止めるためではなく、目的は依頼を―――！？」
「そう、受けたからさ。ある人物に頼まれてね。ここにいる、ある者達を討伐してほしいとね」と、ガイヤはそういうと腰から、大鎌を取り出し言った。「キミ達、ＰＫ集団をさ―――」

今までの経験からかその言葉に反応し、ＰＫ集団は迷いなく一斉に各個武器を取り出した。彼らは身構える。
イバクはガイヤの武器を観察して呟く。
「……鎌闘士（フラッカー）か」イバクは魔典を構えなおし、状況を分析する。「銃戦士と鎌闘士、二人なら三六〇℃攻撃が可能だが、案外懐は隙が大きい。近接攻撃で一気に叩くことが無難だな」

イバクは隣にいるゲランゴに一対一チャットで作戦を伝えていく。
無言で、兄の指示に従う素振りをしたゲランゴ。
果たして、エインが銃剣を構えて宣告した。

「君達をたった今、依頼をもとにＰＫする」
「やれるもんならやってみやがれ！！」

ＰＫの一人が大剣をもって動き出すが、直ぐに銃剣の銃撃の餌食になった。
それが号砲のようにＰＫたちが一斉に動き出す。
戦闘が開始された。

彼らの行軍を遮るようにガイヤがジャンプし、ＰＫ集団の中心に向かう。

「“環伐乱絶閃（わぎりらんぜっせん）”！」

彼の大鎌が地面に振り下ろされると地中から六枚の強靭（きょうじん）な悪魔の巨爪が現れる。六方向に発射され、辺りを切り裂いていく。
それによりＰＫ達は吹き飛ばされていく。

――――ネットゲーム「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒ：２」は一ＭＭＯＲＰＧ《多人数同時参加型オンラインＲＰＧ》である。
開発元であるＣｙｂｅｒＣｏｎｎｅｃｔ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎは現在普及しているＯＳ「ＡＬＴＩＭＩＴ」を開発した有志によって設立され、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」を運営している。ならば、開発したものだが、それは表向きの事。
調べれば、二〇〇六年夏、とある一人のドイツ人“ハロルド・ヒューイック”が「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」プロトタイプである「ｆｒａｇｍｅｎｔ」を持ちこんだ唯一の開発者である事が分かる。無論、彼はプログラムとシステム基幹を独学で開発しただけであり、それをゲームとして充実・補助したのはＣＣ社だ。
現在ではリビジョンが二段階へと移行され、「Ｒ：２」と題しての新作となった。
プレイヤー達はコンピュータのディスプレイか、頭に装着して目の前に光景を見せる「ヘッドマウントディスプレイ」で視覚し、両

手持ちか片手持ちのコントローラによってプレイヤーキャラクターを操作する。会話はボイスチャット対応だ。

ＰＣの移動はトリガーで、攻撃、防御などはボタン一つで行われる。専用のアイコンで発動するのではない。そもそも、マウスポインタは無いため、クリックする必然性はない。標的の選択はコントローラの小さいキーで操作する。

ボタンの組み合わせで何通りもの攻撃方法がある。普通のボタン押しで地上からの連撃、走りながらの突進、ジャンプすれば空中攻撃など様々だ。行動次第で攻撃法が変わる視覚的な意味も含めて、戦闘は多種多様。通常攻撃という括りになる。

相手に反撃の余地なく猛攻をかける特殊技はスペルポイント――ＲＰＧのＭＰみたいなマナ――――を消費してスペル――――物理特殊「アーツ」、魔法も総じてこう呼ばれる――――を設定したコントローラのボタンで何時でも発動が可能で、最大四種類までショートカットである「スキルトリガー」に技を準備することができる。スキルトリガーに設定しなかった技は手間がかかるが、メニューを開いて選択すれば発動できる。先程、ガイヤが使った“環伐乱絶閃”はアーツの技だ。

これはガイヤが持つ大鎌特性の技であり、他にもレベルに応じた大鎌技がある。これは武器が持つ特性をＰＣという人間によって最大限引き出されたものであるため、アーツは武器なしで発動不可能だ。

また「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」では職業（ジョブ）をキャラクター作成時に選択し、職業専用の武器がその場で決定される。それは、彼らＰＣがその役割に徹し、その職業に合った武器しか扱えない、ということだ。

故に武器の弱点を突かれるということは、ＰＣそのものの弱点と言える。近接職業なら遠距離は苦手であり、魔法職なら接近戦を挑まれれば不利になる。そういう制約を背負いつつ、彼らは専用の分野に括られる。

だが、専用の武器を扱う彼らが熟練すると、アーツ、魔法など高度なものを覚えていくのだ。スペルの種類は職業毎に異なり、職業専用となる。“環伐乱絶閃”は大鎌使い“鎌闘士”専用アーツ。ならば、剣士専用のアーツ、魔法士専用スペル、槍使い専用アーツがあるのは道理だ。

あらかじめ「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒ：２」に振り分けられた職業は十一。

オールラウンダーな刀剣使い、斬刀士（ブレイド）。

威力が高い大剣・長刀使い、撃剣士（ブランディッシュ）。

一点突破に長けたドリル状の重槍使い、重槍士（パルチザン）。

連撃が得意な二対一刀の小刀で二刀流使い、双剣士（ツインソード）。

素早い身のこなしと拳と脚という肉体で戦う打撃使い、拳術士（グラップラー）。

範囲攻撃可能な大鎌使い、鎌闘士（フリッカー）。

高度な攻撃・妨害魔法を使う魔典という本の所持者、魔導士（ウォーロック）。

治療・強化補助のプロフェッショナル、杖使いの、呪療士（ハーヴェスト）。

ＲＰＧで賢者の役割をもった幅広い魔法使い、踊り子の、妖扇士（ダンスマカブル）。

蒸気が発達したこの世界観で開発され、遠距離攻撃が得意な銃剣使い、銃戦士（スチームガンナー）。

上記の職業に合った武器しか使えない例外職、様々な武器に換装、高度に戦う特殊ジョブ、錬装士（マルチウェポン）。

これらが蒸気で発達した世界で縦横無尽（じゅうおうむじん）に駆け回り、冒険し、戦い、語り合う彼らの器（クラス）である。

また、武具、アクセサリにはアビリティという効果を付与することが可能である。

例えば、エインが持つ“雷の磁球”は雷属性の効果を持つ。これを武器に付与すると、武器が雷属性となる。他に、防具であるならＨＰ二十％上昇アビリティを付与すればＨＰ最大値が二十％上昇、物理攻撃十％耐性ならば物理攻撃を十％軽減してくれる、という仕

組みだ。
　これが「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」内の冒険者がとる戦闘システム。単なるレベルに僅かな差があっても、職業の弱点、アビリティ、プレイヤースキルを考察、駆使することで格下でも勝てる戦いにできている。つまるところ、よほどのレベルの差がなければ、武力のみならず戦術、戦略が要求される戦いなのだ――――。

「――――このやろぉっ！」

　アーツをし終えたガイヤの前に、刀剣を振りかざすＰＫが彼の目の前に立つ。
　しかし。

「――――！」

　ガイヤはそれをいち早く察知していた。
　ＰＫが刀剣を振り下ろす前に、ガイヤの大鎌が煌めく。斬、と三日月が形成され、ＰＫのＨＰを削り取る。

「行くぜ！」

　この好勢にガイヤは大鎌を振り回して、ＰＫ達を次々と切り裂いていく。
　それと同時に、切りつけられた数人のＰＫが仲間であるはずの他のＰＫに攻撃し始めた。

「な、なにをやっているんだ！」

　ＰＫの一人はその者達に怒声を飛ばすが、直ぐに原因に気づいた。
　ＰＣが桃色に点滅しハートマークが表示されている。バッドステ

ータス「魅了」だ。この能力により敵に恋してしまい攻撃できず、誘惑されるままに味方へと自動的に攻撃させるという設定の強力なバッドステータスだ。

「鎌に魅了能力が付加されているのか」

ＰＫは小さく舌打ちする。

ガイヤの大鎌にはアビリティである「魅了効果」が付与されている。

敵は厄介な相手。たった一振りするだけで大勢が一定確率で魅了に陥る。それだけで一気に戦力は減少する。

モンスターがたまに魅了カウンターを持っており、それが厄介なのである。それだけでも大変なのに、遠く離れた銃戦士エインが、銃撃によりＰＫの接近を許さず蹴散らしていく。

だが、こちら側にはイバクとゲランゴも加勢している。カオティックＰＫがいる。こちらが負けることはない、と。彼は士気を持ち直す。

着々とガイヤが鎌を振り回し、ＰＫ達にダメージを与えていく。

その時、そこを隙にゲランゴが刀剣を構えて迫ってきた。

「うおおおおおおおおっ！」

力任せに振るってくるその刀剣は、斬刀士のすることではない。戦闘スタイルは撃剣士に近かった。

ガイヤは迫り来る刀剣を鎌の刃で防御した。

しかし、それを計画通りのようにゲランゴがニヤリと笑う。

「兄者の言うとおりだ。鎌闘士は懐に入られると弱いんだなぁ」

その言葉に呼応するように別の斬刀士のＰＫが動き、別方向から

ガイヤに刀剣を振るう。
大鎌は造りが普通と違い、三六〇℃攻撃可能だが、意外と懐は隙だらけである。
「終わりだ！　ひゃっはぁぁ！」
ＰＫが刀剣を振るい絶体絶命の瞬間、ガイヤは鎌を瞬間的に懐へと仕舞い。その直後、ゲランゴと斬刀士ＰＫの攻撃を同時に防御した。
それは、大鎌でするのは難しい。ならば、ガイヤが握っているのは。
「そ――――」
「双剣だとぉ！？」
彼が両手に握っているのは二対一刀の短剣、双剣だった。攻撃力は低いが素早さは一級品の武器である。
だが、イバク達は彼を鎌闘士と見ていた。専門職は専門の武器しか扱えないはず。それを何故、鎌以外の武器を持っているのか。
「誰が鎌闘士と言ったよ？」
ガイヤが勝ち誇ったように笑う。
ＰＫはそれで気づいた。
「っ！？　……錬装士（マルチウェポン）か！？」
「アタリ」
その時、遠くから銃声が響き、二人を閃光が持っていく。ゲランゴは綺麗に着地したが、斬刀士はＨＰが０になり、灰色に変わって

倒れ伏す。
――――錬装士とは複数の武器を装備できる万能ジョブで、極めればどんな戦況にも対応できるという利点を持つ。だが、その分成長速度が遅い上に、器用貧乏で能力は専門職に比べると中途半端で秀でているものがない。さらに二種類以上の武器を使いこなすにはジョブ・エクステンドと呼ばれる特別なイベントをクリアしなければならないという、この「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」では一、二を争う不人気職業である。
ゆえに、この職業を使うＰＣはごく少数で、これを極められた場合は天才的なセンスを持っているプレイヤーか、チーターもしくはネット廃人に限られる。
だが勿論、ガイヤはチーターでもネット廃人でもない。だがゲームのセンスも凡人並みだ。ただ効率の良い努力を行った末の、凡人並みの才能による。

「さて、舞いますか！」

さらなる追撃を行おうと、ガイヤは双剣を持ってＰＫ集団に突っ込んでいく。

一方、エインは近づいて来るＰＫを牽制（けんせい）しながら、イバクの詠唱を射撃で止めていた。
イバクは魔法で一気にたたみかけようとしたが、その前に射撃で止められる。何とかしてエインの隙を作ることに思考を巡らせていた。
しかし、有効な手立てはそう簡単には見つからない。
――――くそ、このままではＳＰ（スペル・ポイント）を無駄に消費していくだけだ。どうすればいい？
その時、ガイヤがイバクの目に入る。
彼は双剣でＰＫ達と戦っていた。錬闘士ではなく錬装士だったと

は驚きを隠せないが、今はそれどころではない、とイバクは再びエインに標的を定める。
彼の前には速力重視の拳術士、そして撃剣士。自分だけではと思い始めた時に気づいた。これならばと思い、移動を開始するイバク。
エインは拳術士の接近を許さないために奮闘していた。そして接近の機会を伺う撃剣士に常に注意を払う。かつ、イバクの詠唱を止めなければならない。これは大変な作業であった。並大抵ではできない荒行である。それを、効率の良い動きで実行している。
拳術士を迎撃しつつ、一瞬イバクを見るエイン。

「――――っ！？」

今までイバクがそこにいたのが、今はいない。どこに行ったと思い、辺りを見回すと反対側に彼は移動していた。
詠唱に入っている。
それを防ごうとエインはイバクに向かって狙撃した。結果、詠唱阻止は成功する。
だが、それは彼の策略に過ぎなかった。
遠くからアーツの発生音が響く。エインが振り向くと先ほどの撃剣士がアーツを発動し、急接近して来た。

「く――――っ！」

エインはすぐさま防御体勢に入り、撃剣士のアーツを防いでいく。だが、その間に拳術士の接近を許してしまう。撃剣士のアーツが終えるとすぐさま反撃に転じるエイン。銃で迎撃し撃剣士を引かせたが、拳術士の射程圏内に入っていた。
彼は拳術士の連続パンチを喰らい、ダメージを負う。
攻撃が止んだ直後に銃を撃つが、拳術士は素早い身のこなしで避け、再び拳を振るった。

反撃は許されない。
それがイバクにとって、絶好の機会。魔法サークルがエインにロックオンする。
「終わったな。……“オルバクドーン”！」
火属性の隕石を敵に降り注ぐ。そして同時に拳術士がアーツを発動し、一気にたたみかけようとした。ダメージを与えれば、一機に戦況は逆転できうる攻撃。
それはエインも理解していた。素早く思考を巡らせ、打開策を実行させる。
———仕方ない
そう思った彼があらかじめ作成しておいたショートメールを、誰かに向けて送信した。
直後———。
———————————「“レイザス”！」
横から奔った光の弾が拳術士に直撃し、吹き飛ばす。同時にエインは隕石が降り注ぐ魔法を銃剣で弾き落とした。
「———なんだと！」
イバクがエインの右横数メートル先に新たな人影がいることに気づき、そちらへと視線を送る。
それは一つの錫杖（しゃくじょう）持った呪療士であった。ひらりとしたフレアースカートに魔道士が着るような黄色の軽装な服。そして長い艶やか

な白髪をしている可愛らしい少女型ＰＣだ。

「――“ウリプス”」

少女が回復呪文を唱えるとエインのＨＰが回復した。

「ありがとう、ナミ」

ナミと呼ばれた少女はニコリ、と微笑みを浮かべて頷く。

「さ、三人目だと――――！」

イバクは驚きで声をこれ以上出せなかった、思わぬ伏兵の登場に。

「……だまし討ちも立派な戦術であり、切り札でもある。ピンチまでとっておくものだよ」

そうしてエインは、立ち上がろうとする拳術士にトドメを与えて戦闘不能にさせた。

「くっそ！」イバクは魔法サークルを発動し、エインをロックする。

「――“オルアンゾット”！」

イバクは闇の精霊を召還し、地中から闇の穴を開ける。そこから禍々しい牙が鎌首をあげて凶悪にぎらつかせる。これに喰われれば、ただでは済まないだろう。

だが、その発動前でその場にエインは既にいなかった。

「何！　……消えた？」

そう、一瞬で彼は消えたのだ。

「何故、俺が『蒼雷』と呼ばれているか、教えてあげようか？」

エインの声が聞こえた。どこからだとイバクが思った直後、それは意外な場所からだった。イバクの真後ろから発せられたのだ。

「なっ、一気に俺の後ろに！？」

イバクが驚愕するのは尤(もっと)もだ。

一端の銃戦士はそんな芸当は不可能であったからだ。

だが、残念ながらエインはその一端ではなかった。彼の装飾品には移動速度アップの素材をカスタマイズしていたからだ。先ほどは、彼が一気に間合いを詰めてイバクとすれ違い、後ろに振り返ったのである。

「雷如きの速力を持っているからだ」

背中越しに語りそして、イバクに向かって銃剣を構える。

「“轟雷爆閃弾(ごうらいばくせんだん)”」

貫通性の弾を撃ち、それは目標へと一直線に奔る。

イバクは銃弾を打ち込まれ、後退した。

「くっ……」

イバクは同時に感電を受ける。エインの銃剣に雷攻撃が付加され

ているのは本当のようである、と彼は確信し、真横で戦うゲランゴへと目配りする。

「――“天無双飯綱舞い”！」

ガイヤがゲランゴを空中で、連続で双剣によって切り刻む。

ゲランゴはイバクの近くに落下し、態勢を崩して倒れこんだ。

「大丈夫か、ゲランゴ？」

「……ヒヒッ。だ、大丈夫だぜ、兄者。それより、なんか皆集まっているぞぉ？」

ゲランゴの言葉でイバクはハッと振り返る。

いつの間にか主力級の残ったＰＫ達がイバク達二人の周りに集まっていた。否、集められるほどに追い込まれている。

「――！」

イバクは気づいた。敵の狙いが。

敵は銃戦士、錬装士そして呪療士。

錬装士はあくまで前線ジョブでその特性上一気に大ダメージを与えられないし、呪療士は攻撃魔法スペルを持っているが、やはり魔導士には上級魔法を覚えるか否か、魔力の違いで大変劣っている。だが、銃戦士のあるスペルなら広範囲で特大ダメージを与えることが可能だ。

そして気づいた。ゲランゴが連続攻撃を受けすぎて、あれが間近だということに。

「まずい、てめら離れろ！」

イバクが叫んだ時には時既に遅し。

「“ザンローム”！」

呪療士であるナミがＰＫ集団に向かって、風属性魔法を発動。竜巻を起こした。

ＰＫ達は竜巻によって身動きが取れなくなってしまう。それをきっかけに、ゲランゴに青色と紫色のリングが表示された。

――――しまった……！

彼らの狙いはこれだったのだ。そして一気にたたみかける作戦だったのだ、と。イバクは心中で毒ついた。

イバクの目の前にはエインのＰＣボディが黄色く変化し、照準が現れた。

――――レンゲキ！

画面に大きくレンゲキの文字が表示された。

――――レンゲキとは一体の敵に対し、一定のコンボを与えると青色と紫色のリングが表示され、そのリングが表示されている間に、スキルトリガーからスキル攻撃を発動することで、それに発展する特殊な効果。

発動させた回数に応じてレンゲキボーナスとして経験値が加算される利点がある。初心者は普段からこれを狙い、ＬＶアップに早く近づけることが良くあったが、実はその間、される相手は防御も移動もあらゆるリアクションが拒否（リヒューズ）されるのだ。つまり、無防備の相手を追撃出来る点がある。

さらにはレンゲキ効果によりスキルの攻撃力がアップする。しかし、それはあくまでリングが表示された敵にだけ、適用される。

だが、それ以外の敵へはエインの攻撃力によって普通のダメージでも十分な威力を誇る。

「“塵球至煉弾（じんきゅうしれんだん）”！」

すなわち、銃戦士が上空へ銃を三連射し、目標を含む大範囲へ特大ダメージを有する塵球至煉弾はレンゲキ効果により、その効果は魔導士の攻撃スペルと同等の、あるいはそれ以上の攻撃力になる。

エインの銃剣から光弾が発射され、イバクを中心にＰＫ集団の上空に光が降り注ぐ。

彼らに与えられたダメージはゆうに２００の位を超えていた。ダメージアップの対象のゲランゴを含めたＰＫ集団が次々と戦闘不能に変わっていく。

イバクだけは何とか生き残ったが、ＨＰは2桁しか残っていなかった。

「くそっ――――！」

まさかの敗北。

カオティックＰＫになってから一回もＰＫされたことはなかったイバク。こんな手の込んだ方法で負けるなんて想像出来ただろうか、と。

勝負がついたと悟ったのか、エイン、ガイヤ、ナミが彼を取り囲んだ。

「――――お前ら、一体何者だ？」

イバクが最後の捨て台詞のように尋ねた。

エインが銃剣を彼に構えながら応える。

「ＰＫ、護衛、アリーナ、初心者支援など引き受けるギルド“スパイラル”のギルドマスターのエインとガイヤ、そしてナミだ」

スパイラル、それはエインが立ち上げたギルドの名だ。様々な仕事を報酬と引き換えに引き受ける。何でもやる便利屋のような仕事はしないが、特に中級者を中心に支援する傭兵ギルドだ。

「彼から奪ったアイテムを返してもらおうか？」

エインが視線を向けると、この戦いに呆然と見つめているＰＫに絡まれていた少年斬刀士と少女妖扇士が座り込んでいるのが見える。恐らく、既にＰＫされていた彼らの仲間もこの戦いを見ていただろう。

「あれは彼らが最初に見つけたアイテムだ。使う権利は彼らにある。大人しく返してもらうよ？」

「――――チッ、分かったよ……」

イバクがプレゼント画面で、先ほど奪ったＳＰ封印の素材をエインに渡した。

エインは銃剣を仕舞うとイバクに背を向けて、少年斬刀士の許に向かう。

ガイヤとナミも彼の後に続いていった。

「ほら、これはキミのだ」

エインは少年斬刀士にアイテムを渡した。

渡された彼は笑顔で「ありがとうございます」とエインに告げた。

頷き返すとエインは隣にいた少女妖扇士に優しく語り掛け始め、頭を撫でる。

「もう大丈夫だ。怖かったろう？　……安心するんだ」
そう言うと少女は涙声で「うん……」と頷いた。
「ナミ、彼らの仲間を蘇生してくれ」
「分かった」
ナミは灰色表示の彼らの仲間の前に立つ。
「“リプメイン”」
ナミがそう唱えると、倒れたＰＣに光が走り、元の色彩を取り戻してゆく。
そのＰＣはゆっくりと起き上がり、疲れきった顔で首を上げた。
「“ウリプス”」
彼のＨＰが回復する。
仲間達が近寄り、微笑んだ顔で無事を確認しあった。その後、彼らは口々に「ありがとう」や「助かりました」と頭を下げた。
「いやいや、いいってことよ。さあ、獣神像まで、安全に冒険できるように俺達が護衛をしよう。安心して冒険を再開してくれ！」
そう陽気にガイヤが彼らの肩を叩いた。エインらは三人組と共に奥に歩き始める。
しかし、そこを見計らったように生き残ったイバクが口元を歪ませた。

「ハ――――ハハハ！　敵に背中を向けるとは愚かだな！　まとめて消えやがれぇぇぇ！」

彼が魔法サークルを発動し、エインにむけて放った。サークルは一直線にエインに向かい、到達しようとした。

「――――全く、血の気の多い奴だ」

エインは振り向くと素早く銃剣をイバクに向けて撃った。
イバクが術を発動させる前にＨＰが０になり、その場に倒れる。
銃剣を掲げた彼、傭兵団の長である青年は、

「因果応報、ってやつだね？」

そう言って微笑んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

大聖堂で、一人の人物が赤い傷跡を前に立っていた。

「来た。来た、来た、来た、来た、時が来た。真実を……追い求める真実を。だが、真実を追い求めること。それは無償ではない。大いなる目的に、犠牲はつきもの。何故だ？　何故我々は……。……我々は犠牲を超える。なにも犠牲にしない。そんな道を……。そう約束するよ。我が――――……三爪痕（トライエッジ）」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「一つの終わりは、新たらしい始まり……。俺達の旅は、これからも続いていく。……そうは想わないか？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「蒼雷の……！？」

「終わりは必ず訪れる……」

「それと決め付けるのか！」

「何もかも奪う存在、絶望と希望の合わせ鏡……」

「奴は……どんな想いで、あの光に包まれたと……」

「アンタが最強の……」

「何故、碑文が……！？」

「どうして……」

「貴方、彼に似ている……」

「お前が俺の居場所を奪った……！」

「共感したから、気になって親近感が沸いた……」
「お前、視えたのか？」
「消す、消す、消す、消す、消してやるぅぅぅ！」
「だが、意思は存在するものだ」
「それが、ＡＩＤＡ」
「他の誰でもない、貴方のことが……！」
「このままでは、生まれる！？」
「目を覚ませぇぇ！」
「私だって、私だって……！」
「な、何だこいつら！？」
「再来する……冥王が」
「来た！　来た、来た、来た、来た、さあ、応えろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

・ｈａｃｋ／／Ｇ・Ｕ・　Ｒｅｕｎｉｏｎ

この物語は、一人の銃戦士によって世界が刷新し、再び世界への

帰還を待ちわびる人々の中で、三人の人間とそれに関わる者達と共に、新たなる脅威と戦うことを運命付けられた、喜びと憎しみと愛と希望と絶望と悲しみ、そして贖罪（しょくざい）と再会の物語である……

次回予告

人々は笑いあう、話し合う、喜び合う。それは人がコミュニケーションを図るためのプロセス。苦しみ、悲しみ、怒りなどはもってのほかなく、それは平和なこの世界に生きる者がいるかぎり。

三人が唯一出会いの場。そして、そこから交わされる会話はなんとも陽気。笑いも混ざり、売り子も混ざる。新たな道具と異世界。そこは製作者が新しく追加させた町。そして、新たなる舞台。

プレイヤーは装置に一つの文字を入力する。

Ｗｏｒｄ　１　アップデート後の「世界」

光によって刷新された世界に、どうか幸せを……

Proroouge～プロローグ～（後書き）

・ｈａｃｋ／／Ｇ・Ｕ・　Ｒｅｕｎｉｏｎの世界にようこそ！
作者の蒼雷のユウです。

初めまして。この小説家になろうでの投稿は初となります。どうかお見知りおきを♪

この作品は私が大好きなゲーム「・ｈａｃｋ／／Ｇ・Ｕ・」の後日談として、ファンフィクションとしてオリジナル要素を加えた作品です。多少本編の設定と異なる部分が今後出てくる可能性がありますが、楽しんでいただけたら幸いです。

前書きにも描きました通り、これは改稿された作品です。この作品を描いたのは、約三年前くらいになります。これが人生初の処女作品であり、初の連載作品になります。当時としては、結構幼稚な文章が綴られ、日本語ではなくてにをはを間違えてばかりのプロローグでした。本編の設定とかなり矛盾もして、正直目も当てられませんでした。私はこの三年、小説に情熱を注ぎ、腕を磨いて、様々な交流を果たしました。

そして今回、このサイトに今の自分の腕と作品を見てもらいたく、投稿を決意しました。勿論、読者の皆様が楽しんでいただけたら、凄く嬉しい事です。

また、労いの言葉、感想、批評などがありましたら、今後の描写の糧になります。もっと成長できれば描いている甲斐があります。

さて、まずプロローグが始まったわけですが、今日また時間を改めて、第一話を投稿いたします。以後、約一週間ごとに改訂し終わった話から随時投稿していこうと思います。最新は、第十三話になっています。それまでどうかお付き合い下さい。

では、第一話でまたお会いしましょう♪

WORD　1ー?　アップデート後の「世界」（前書き）

※この物語は、ＰＳ２用ソフト「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」本編から数カ月後の世界が舞台です。初めて．ｈａｃｋの世界に触れる方の為に、随時解説を入れておりますが、物語の都合上、本編のネタばれ要素が入っています。．ｈａｃｋの世界をゲームで楽しみたいと考えている方は、ゲームを先にプレイするのをお勧めします。

　また、この作品は過去某サイトで投稿したものを加筆修正、改稿したものです。（そのサイトの管理者から許可は得ています）

WORD　1ー？　アップデート後の「世界」

WORD　1　アップデート後の「世界」

月は満ちて冴えわたる。雲間から垂れる青銀の気に瓦屋根が映える。地・水・火・風・空を意味する五重塔と回廊が本殿を囲う大伽藍（だいがらん）。枯山水の中庭では篝火（かがりび）が焚かれている。　ここはそんなところを中心にしたエリアだ。

「――様！　――様！」

転送装置が置かれた東屋（あずまや）から、本殿へと続く渡り廊下で、エリア全体に響くくらいの誰かを呼ぶような叫び声。

その叫び声の持ち主は楚々とした印象の和装の女性ＰＣだった。

彼女が誰かを抱いている。生成りの服で、まるで日本神話の神様みたいな容姿、獣人ではなく人型で頭に小鹿のような小さな角がある十二、三歳ぐらいの少年ＰＣだ。

彼の周りには黒い斑点が浮いていた。少年は死んだように目を瞑り動かなかった。

その近くには二人の人間がいた。

青年タイプの撃剣士。新緑色の長髪を束ね、切れ長の目には隈取りをし、陣羽織のような衣装をした時代劇ででてくる若武者を思わせるＰＣだ。彼は腕を組みながら口元を歪ませている。

彼の隣には少女が立っていた。緑のキャミソールドレスに、レース飾りのついたカボチャパンツ、長手袋に膝上のストッキングを穿いている。小鳥のような背中の羽飾りが肩から伸びている。白い大きい帽子を被り、金髪で琥珀色の瞳をした、いかにも礼儀正しそうな呪療士の少女。

しかし、彼女のその瞳は生気がなく虚ろだ。周りにも黒い斑点が

浮かんでいた。

「聞け、諸君！　ここはもう駄目だ！　今まで我々はＰＫ廃止を訴えてきたが、誰一人としてその言葉に耳を貸す者はおらず、ＰＫは激化する一方。そして、これほどまでに大きくなったギルド。最早お優しいだけの――様ではまとめきれん！　このままではこのギルドは一朝一夕（いっちょういっせき）に瓦解（がかい）するだろう。だが、私を先頭に諸君らが動いてくれれば、プレイヤーの心を殺し、無駄な感情を省き、差別、ＰＫ、嫌がらせ、欲望などの感情を消すことなどのコツを掴むのは案外容易いのだ！　そうすれば誰にもさげづまれず、疎まれず、争いのない平和な世界を作ることができる！　皆、自身の正義の下に、私へと集え！　私は待望の使者を迎え、力を得た！　この力を皆に分け与え、私の……このギルドの完成を見る！」

撃剣士のＰＣは威風堂々と声を張り上げた。

今ここに倒れている少年ＰＣに目もくれず、ただそう宣言した。

その顔は狂気の顔そのものだった。

集まった野次の先頭に黒いジャケットを羽織った青年が立っていた。

彼は黒い斑点に包まれている少年を見つめていた。その顔は驚愕そのものだった。

まるで、小さい子供が気に入って遊んでいた玩具を他の子供に奪われたように。自分の尊敬する人が殺されたみたいに。

そして叫ぶ。

――――「欅さん！」

「逃げて！！」

少年ＰＣを抱いていた女性ＰＣが声を張り上げた。
それが合図のように近くにいた、呪療士の少女の目が黒ジャケットの青年に向けた。否、その動作はかなり揺れていた。そして、ゆっくりとその手を彼へと掲げられた。

――その直後、黒泡の海が広がった。

「がぁああああああああああああああああアアアアアアアアアア嗚呼嗚呼亜唖亞亞阿吾蛙ＡＡＡ！」

そこには耐え難いほどの……――

彼は激しく起き上がった。
呼吸が激しく、心臓が熱い。まるで、脱走する囚人のような感情と表情。ベッドの上でそんな表情をした青年が胸に手を当てる。
起き上がった先には、朝日が差し込むカーテンが。勉強机に白い

ソファ。服を仕舞うクローゼットなどの部屋一式が目に入る。
そして、ここは青年の自室だということを彼は自覚した。

「夢……」

青年はそう呟いた。
最近よくこんな夢を見る。まるで悪夢から飛び起きたようだ。それで逃げるように起き上がるとはとても情けなく感じ、溜息を吐く。
彼は、遠藤（えんどう）　新二（しんじ）。福岡在住の十七歳の高校二年生である。昨夜、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」で「エイン」というＰＣを使ってインしていた。
「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のやりすぎだろうか、彼はここ近く、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」に関する夢を見ることが多くなった。中でも、先ほど見た夢は「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」関連で見た中では最悪の悪夢だ。夢の中で実際に恐怖を感じたのだから。

「夢見て実際恐怖するなんて……病気だね、こりゃ」

彼はそう言つつゆっくりと起き上がり、ドアを開けてリビングに向かう。
朝六時半なので彼の親は当然起きていない。だが、これが平日の当たり前の生活だった。この時間に起きないと朝食や洗顔の時間もなく、学校に行かなければならないのだ。移動時間も考慮された起床時間である。
茶碗を取り出し、そこにご飯を入れ、冷蔵庫から納豆を取り出す。それと同時に鍋に水を、そして味噌（みそ）を入れ火で暖めた。しばらくして、味噌汁を新たな茶碗に注ぎ、お盆に載せる。近くにあるテーブルに載せ、彼自身も席に着いた。最初に牛乳を飲み、その後、納豆に手をつける。味噌汁を貪りながら、ご飯を口に入れ、食卓を終え

る。
食器を洗い片付けると、顔を洗い、歯磨きする。
その後は今日の授業の確認を済ませ、制服に着替えて外に出た。
新二の学校は隣区という遠くにある。近くでバスに乗り、駅に向かう。地下鉄に乗って十分後に目的の駅に着き、下車した地上に出ると日が差し込み、晴天の空が目に入った。
学校に着くと、校門をくぐる。彼の学校は土足から上履きに履き替える必要はないので、そのまま自分の教室に向かう。
既に他のクラスメイトが教室に入って雑談していた。
新二は何も言わずに自分の席に着いた。そのまま英語の文法書を開き、読書にふけた。
始業のチャイムが鳴り、教師が教室に入ってくる。いつものＳＨＲ（ショートホームルーム）。いつもの連絡事項。そしていつもの授業風景。何も変わらない。そしていつもの彼の生活だ。
授業が始まり、午前は睡魔との闘いだ。睡眠と戦いながら、教師の声に耳を傾ける。もしかしたら、右の耳から入って左の耳に向かってすり抜けるだけかもしれないが。
午前の授業を終えると、昼食の時間だ。クラスメイトと共に食堂に行って、ご膳を注文し、クラスメイトと雑談しながら食を進める。
午後にはすっかり目が醒め、授業を真剣に取り組む。
それが彼の日常だった。そしてその日常に半年前から始めたものがあった。

今日の日程が終わり、クラスメイトが帰る支度や部活の準備を整える。新二も帰る支度を整え、教室を出た。そして一直線に学校まで来た地下鉄の駅に向かって家に帰った。
新二が「ただいま」と言うと、奥から「おかえり」と母親の声が聞こえた。今晩の夕食を聞いて学校の話をして、バッグを持ち自分の部屋に入る。

バックから教科書とノートを取り出し、今日の宿題を終わらせる。宿題を早く終え、明日の予習に取り掛かる。その途中で夕食の支度ができる。父親は仕事の関係上、帰りがいつも遅い。二人のまま食事を迎える。

夕食をとりながら母親とのコミュニケーションをはかる。夕食を終えた後、食器を片付けて、宿題と予習をすると言って、部屋に戻った。しかし本当はもう全て終わらせていた。ならば彼がやることは一つ。世界に飛び立つことだ。

新二は自分の机から、サングラス型の「Ｍ２Ｄ（ディスプレイ）」を取り出す。コードをパソコンに繋ぎ、コントローラーを持ち、Ｍ２Ｄを装着する。パソコンを起動し、読み込むまで数秒。デスクトップが開き、メールを確認した後、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をクリックする。読み込み画面の後に、キャラクター選択。二体のＰＣがいるが、その中でも高レベルＰＣを選ぶ。銃戦士、エイン。新二のもう一人の姿だ。「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のメインメニューが開かれ、Ｌｏｇ　Ｉｎを選択する。そして新二は世界に突入した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

？

Λルートタウン　鋼鉄都市「マク・アヌ新市街」

降り立ったのは、あらたなルートタウンとしてそびえている、「マク・アヌ新市街」だ。数ヶ月前に行われた大幅アップデートにより新たなサーバーが加えられ、それにともない、このルートタウンが設けられた。新サーバー・Λ（ラムダ）サーバーの拠点として。蒸気文明が作り上げた鋼鉄の高層都市がそびえる。昔は遠景扱いだったが、こ

の度、実際にいけることになった。
「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」日本語版サーバーには、推奨レベル帯ごとに複数の小サーバーがあり、それぞれギリシャ文字を冠した街が設けられている。
Δサーバーは初心者が、Θは中級者、Σは上級者、そしてここΛサーバーは熟練者が集い、エリアは彼らに合ったレベルのモンスターが徘徊している。

「カオスゲート」という、別サーバーとの橋の役割を持つ巨大転送装置からログインしてきたエインは、メニューでパーティー画面を選ぶ。二人の幼馴染はオフラインと知らせていた。
まだ、宿題や部活をやっているのだろうか？　と、彼は思いつつ仕方がないので、近くの公園で休みを取ることにした。
――マク・アヌ新市街の中央に位置する公園には自然とプレイヤーがたむろしている。会話（チャット）が聞こえ、メッセージウィンドウのログを次々と流す。ルートタウンとは、街。すなわち、経済活動と出会いの場所であり、憩いの場だ。ここには「道具屋」「武器屋」「魔法屋」などＲＰＧではおなじみの施設が用意されている。しかし、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のようなネットゲームでは取引の大半、プレイヤー間で成り立っている。誰しも物々交換（トレード）を行い、露店を開くこともできる。店売りよりも相場は安く、普通に売るよりもプレイヤーに売った方が売却額が高いということから、広場では露店が敷き詰めれて賑わっている。ＧＰ――お金さえあれば、レアアイテムだって手に入るのだ。ここで仲間を募り、パーティを組んだプレイヤー達は冒険のエリアに旅立っていく――。
そこで、エインは待つこと数十分。急に視界が暗くなった。

「だ～れだ？」

まるで、誰かに目隠しされたようだ。

「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」ではモーションコマンドを入力することで、パターン化されたリアクションすることが可能だ。そのリアルさは相手側にも影響されるほどだ。
エインは小さく溜息を吐いた。

「ふう……ナミ、だろう？」

そう言って振り返る。
一人の呪療士。ひらりとしたフレアースカートに魔道士が着るような黄色の軽装な服。そして長い艶やかな白髪をしている少女、ナミが立っていた。

「バレちゃったか……」

そう言って、彼女は笑みを浮かべる。

「遅かったね？」

エインは尋ねた。

「うん。宿題とかリアルの都合で遅れちゃってね。ゴメンね、待った？」
「別に。大したことじゃないから、気にするな」

エインは優しい口調で微笑んだ。

「優等生は忙しいみたいだから。別にリアルまで干渉はしないさ」
「もうっ……一言多いよ」

ナミはそう頬を膨らませてやさぐれた。

「ははは。ごめん、ごめん」

ナミ、彼女のリアルは南（みなみ）　奈美（なみ）。十七歳の高校二年生。

有数の進学校に通う優等生である。そのために勉学も忙しいらしく、集合時間に遅れることはよくあった。

二人はリアルの顔見知り――幼い時代の顔しか見てないので今の顔つきは知らない――で同じ県内に住んでいる。別々の高校のため会うことはないが、こうして世界で毎日のように会っている。

「ガイヤは？　まだ来てないの？」

ナミは辺りを見回した。

そこに、彼女の見知った人物の姿は見当たらない。

「そうだな……ガイヤがナミより遅れるなんて珍しいなぁ」

ガイヤは普段から集合時間を守っている。その彼が遅れているなんて稀なことだ。

「部活、まだやっているのかな？」

「どうだろう？　この時間ならとっくに終わっているはずなんだが……」

彼の帰宅時間は電話で直接聞いているエイン。今は午後七時。部活も終わって帰っているはずだった。

「ちょっと、あいつのケータイに電話してみる」

そういって、エインのリアル、新二がＭ２Ｄを取ろうとすると。

「あ、ちょっと待って。――――来たみたいだよ」

ナミが指差すと、カオスゲートの方から、誰かが走り寄ってきた。赤い鎖帷子に茶色い半袖コート、金属のブーツを穿いたいかにも戦士系の井出達、短く切られた赤髪。陽気な雰囲気をしつつ、整った顔形でありながら、どこか野性味も感じさせるような青年。ガイヤだ。

「よう！　悪い、悪ぃ、遅れちまった！」

「遅いよ！　何してたの今まで？」

駆け寄ってきたガイヤに、手を腰に当てて頬を膨らませたナミが尋ねた。

「……お前、けっこう根に持つタイプなのな」

ガイヤが呆れ顔でナミに見つめ返す。

彼女の口調と仕草は前にガイヤがしていた言動だ。昔、ナミが大遅刻し、彼の第一声がそれだったのだ。それをナミが仕返しとばかりに真似したのである。

「悪い。本屋で買いたいものがあってな。それで遅れちまったんだ」

「そうか」

陽気な雰囲気をした性格で、エインが最も信頼する人物でコンビネーションは抜群にいい。ガイヤのリアルは横浜在住の北原（きたはら）　和樹（かずき）。十七歳の高校二年。ＰＣの外見はリアルの外見とそっくりである。但し、ゲームの性格はロールであり、リアルの髪は黒。運動も勉学も両方こなすほうで、万能な男子である。

――――元々は二人と同じ県内にいて、新二と奈美と一緒に行動していくほどの仲だったが、中学二年で親の都合により引越しすることになってしまっていた。しかし、引っ越した後も時々連絡は取り合っている。

新二から、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のことを知り、交流の場としてガイヤを作ったのが、離れ離れの三人がこのネットゲームで会うそもそものきっかけだ。

「何の本を買ったんだ？」

エインが訊くと。

「参考書と小説」とガイヤが応えた。

「成る程ね」

「で、今日は何するんだ？　珍しく、依頼は無いようだし」

ガイヤが気軽に尋ねた。

“スパイラル”のギルドは傭兵稼業だ。告知を見て何か頼みたい事ができたプレイヤー達の依頼によって、彼らは動く。依頼が来た時は、メールで報告が入るようになっている。

今日は、依頼のメールが一通もないので、新しいメールが来るまでは非番だ。

その時にナミが元気よく挙手する。

「じゃあ、久しぶりに買い物しようよ。ちょっとここに来る途中、良いもの売ってるのを見たの」

特にすることは無いので、今日はのんびりと買い物することになった三人。ナミが先頭で歩き始める。

二人も彼女の後に続く。

彼らが行き着いた先にはギルドショップが並ぶ広場だった。数多くの屋台が立ち並び、売り子をしているＰＣが立っている。
その先に柔らかな声で宣伝しているショップがあった。

「たった今、新入荷したばかりの素材アイテムがあるぞぉ～。見ていってくださいだぞぉ～」

ギルドショップ「どんぐり」の売り子をしているのは、獣人ＰＣだった。
身体は大きいが、背が低い。薄いピンクの髪に、同じ色のマフラーとズボンを見につけ、お腹のおへそに絆創膏（ばんそうこう）を貼っている。顔は獣人ＰＣらしい顔をしている。「だぞぉ～」が語尾につける癖があるが、顔とその口調とのギャップで結構人気がある。
――「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒ：２」では、二つの種族がある。人間と獣人。獣人のグラフィック、その総数は動物の種類に反映されており、作るだけでも楽しいだろう。
ナミはその獣人ＰＣを見つけると、ゆっくりと駆け寄った。

「こんにちわ、ガスパー君」

ナミは獣人ＰＣの名前を呼んだ。
獣人ＰＣ、ガスパーは顔を上げるとナミの姿を確認する。

「あぁ～、ナミ～。いらっしゃいませだぞぉ～」

二人との会話は古い知り合いのようだった。それもそのはず、ショップ「どんぐり」にとって、ナミはお得意様なのだ。
彼女は買い物をするとき、必ずこの店に立ち寄る。
「どんぐり」はギルド“カナード”直属のギルドショップだ。頻

度の高いアイテムを取り扱っているわりには、価格も良心的で質も期待できる人気店の一つだ。特に、初心者とお得意様とは融通がきく。

――“カナード”は初心者支援ギルドとして有名なギルドである。数ヶ月前はとても小さいギルドで人数も少なかったが、現ギルドマスターが、公式対人戦アリーナ、「紅魔宮」、「碧聖宮」、「竜賢宮」のチャンピオンになってからギルドランクが急上昇し、現在は大ギルドとならぶ有名ギルドとなっていた。それでも、初心者支援ギルドとしての評判も高く、ギルドマスターを含むメンバー全員が忙しく活動している。

最近は初心者支援のほかに、新たな目標が出来たらしく、何かを捜し求めるように、エリア中を駆け巡っているとのもっぱらの噂だ。

「今日、何か良いものある？」

ナミがニッコリと笑顔を浮かべて尋ねた。

「今日はね～、良い素材アイテムが入荷したんだぞぉ～。ナミもきっと気に入ると思うぞぉ～」

そう言って、ガスパーが見せたものは新属性、氷雪攻撃を付加する素材、「雪女の息吹」だ。

「わぁ～♪　良い素材アイテムだね。しかも、氷雪攻撃付加というレアアイテムはなかなか手に入らないの」

ナミはアイテムリストを見て、目を輝かせた。

氷雪攻撃は相手に氷攻撃を与える。ダメージは小さいが、一定確率で同時にバッドステータス「凍結」を与えるという。

彼女はこういうアイテムがずっと欲しかったのだ。モンスターが

自分に襲い掛かってきたときに十分対処できるからだ。
――――「凍結」は相手を凍らせて、動きを封じるというもの。「麻痺」とは違い、一瞬体が動くということはなく、ずっと固まったままだ。解消するには一定時間経つか、炎を与えるか、状態回復を使えばいい。
これを武器に付加すれば、呪療士の生き残る確率がぐっと高くなる。

「ま～た、素材アイテムで目、輝かせてるのか？」

ガイヤがアイテムリストを見ながらナミに向かって言った。

「いいじゃない。『雪女の息吹』ってダンジョン中探しても、なかなか見つからない代物なの。なかなかのレアだよ。それを目キラキラして何が悪いの？」

ナミが欲しがるのも無理は無い。彼女は有数の素材コレクターで、彼女のバッグには素材アイテムがぎっしりと詰まっている。

「それに、あなただって、私の助言と『魅了』付加素材渡したから、バトルもあんなに有利になったわけでしょ？　私のおかげじゃない」

ガイヤの大鎌には「魅了」が付加されている。その素材はナミからもらったものだった。大鎌としての攻撃力を削ぎ、状態異常を広範囲に与えるという利点をつけたのだ。
彼の役割は前衛で数々の状況に対応できるが、あくまで主力はエインだ。そのほうが、勝率も大変上がったのだから。
そう言われるとガイヤは返す言葉が無い。
話が済んだと思ったのか、ナミはしかし一つの疑問をガスパーに問う。

「でも、こんなレアアイテム、どうして出品されているの？」
「うん。それはねぇ～」
ガスパーの話によると、数日前にギルドマスターがエリア探索を行ったときに偶然発見したそうだ。しかし、メンバーの中にその素材を有効利用できる者はいなかったため、どうせなら他の人に利用してもらおうとマスターが提案したのだ。
「なるほど。貴方のギルドマスターって優しいんだね」
「そうだぞぉ～。マスターは優しいんだぞぉ～。昔とはすっかり別人のようだぞぉ～」
彼らのギルドマスターは昔、有名なＰＫＫ――Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒ。Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒを専門にＰＫする人――として恐れられていた。当時の性格は凶暴という一言で、触れたらナイフみたいに切られるというほどの人だったそうだ。
しかし、ある日を境にその性格は徐々に丸くなり、今では初心者にも優しく指導し、ＰＫＫも止めるほどの性格になったという。それと同時に彼の周りにも沢山の仲間ができて、今ではこの「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」内では有名なＰＣだ。
それでも未だ武闘派ギルド“ケストレル”は彼をＰＫして名を上げようと機会を伺っているのだが。
「この素材はいくら？」
「一万五四〇〇ＧＰだぞぉ～」
ＧＰとは「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」内の通貨のこと。
所持金を確認するナミは、金銭面に余裕があると納得しつつ、価

格を見ても高くは無い事がわかる。決断は早かった。

「良心的ね。買った」

そう言って、ナミはお金を渡す。それと同時にガスパーから素材を受け取った。

「ナミならいつでもサービスするぞぉ～。また来るんだぞぉ～」

「ふふ、ありがとう」

二人が笑いあっていると、遠くから新たな声が上がった。

「ガスパー！」

遠くから青年ＰＣがガスパーに呼びかけた。彼はそのまま駆け寄ってくる。

緑を基調とした服を羽織っている。短髪から髪を結んで、細いポニーテールをした茶髪。まるで髪にそのまま細い髪をつけたような髪型だ。温厚な顔つきで真面目そうな青年斬刀士（ブレイド）。

「あ、シラバスぅ～」

ガスパーが振り返り、勢いよく手を振った。

シラバスと呼ばれた青年は“カナード”のメンバーの一人だ。ガスパーとよく行動を共にすることが多く、最初に“カナード”を立ち上げた古株メンバーだ。

「ガスパー、調子はどうだい？」

「うん、元気だぞぉ～、調子もいいぞぉ。あのねぇ～、ナミが例の素材使ってくれるんだぞぉ～」

ガスパーがニッコリと愛嬌ある顔で笑って、クルリと踊る。
シラバスはナミに目を向けた。
「やあ、ナミちゃん。いらっしゃい。こんばんは、かな？」
「こんばんわ、シラバスさん」

ナミがお辞儀のモーションをした。
シラバスは彼女の後ろにエイン、ガイヤが立っているのが見えた。
「こんばんは、エインさん、ガイヤさん。昨日はありがとうございました」
「大したことじゃないですから、気にしないで下さい」

シラバスがそう挨拶すると、エインが優しく答える。
実は、昨日ＰＫ（プレイヤーキラー）を討伐してくれと依頼してきたのはシラバスだった。
昨日、襲われていた三人組がカオスゲートにいたときに、近くにいたＰＫ集団が「いい獲物だぜ、やっちまうか？」と、相談し合っていたのを、偶然シラバスが聞いてしまったのだ。
三人組が転送し、その後をつけるＰＫ集団。
シラバスは助けに行こうと思ったが、相手はかなりの高レベルで、人数も多い。知り合いにも助けを求めようとしたが、ほぼ全員が今日に限ってＯｆｆｌｉｎｅかＢｕｓｙとなっていた。
どうしようかと悩んだときに、ガスパーからエインのギルド“スパイラル”の話を聞いたのだ。シラバスは早速、三人組を助けて欲しいと依頼。
エイン達は指定の場所に急行して無事、三人組を救ったのだ。
「最初、君たち三人だけで行くと聞いたときは心配しましたよ。強

いんだね」
「まあな」と、ガイヤが誇らしげに言った。
「でも、報酬はあれだけでよかったの？　もう少し、お支払いすることもできるけど……」
シラバスが報酬について、エインたちに訊いた。
彼らの報酬はまず、前金と成功報酬の二つで依頼報酬としている。前金の理由は、昔、依頼内容を遂行したのに未払いした依頼者が続出したからだ。そのため、つい最近盛り込まれたのだ。前金の料金は基本的には成功報酬と比べると大変安い。例え、未払いが出ても、前金があったら任務で消費した分のアイテムを少しは買い戻せる。
だが、昨日の依頼の成功報酬は前金となんら変わりない金額だった。
そのことが、シラバスにとって大きな不思議だった。
「ああ、あれで十分だよ。あれだけでも十分活動できるし、カナードのショップはいつもサービスしてもらっているから」ナミがそう答えた。彼女はニコリと笑って、言った。「だから、気にしなくて良いよ」
「……そうだな。ナミはちゃんと計算して資金を立ててるから、大丈夫さ。ちゃんと裏まで計算してるって」
ガイヤは補足するように言い、腕を組んだ。
だが、その言葉を聞いたナミはガイヤへと勢いよく振り返る。その顔つきは、結構厳しい。
「……ちょっと。その言い方だと、私が計算高い女だって勘違いされやすいじゃない！」

「え？　だって、お前数学得意じゃん。てっきりそうだと思ったし、買い物上手だし」
「それは全く違うし！」
「……まあまあ、二人とも落ち着いて」

ガイヤとナミが漫才らしいケンカを始めると、エインが二人を窘める。
その光景にシラバスとガスパーもつい笑ってしまった。

「ありがとう、皆さん」

シラバスはこの三人に深く感謝した。
彼らの善意と思いやりに、つい最近までＰＫという行為が横行していた世界の中で、その存在は深い。彼らの態度に感謝する。

「皆、仲良しなんだぞぉ～」

ガスパーは笑って拍手のモーションをした。
喧嘩するほどなんとやら、という言葉を思い出して言ったのだろう。
すっかりガイヤの冗句にのせられたナミは我に返って咳払い。

「えほん……。さてと、ちょっと私の杖、カスタマイズしてみるね」

ナミはメニュー画面を開き、カスタマイズを選択する。先ほど買った「雪女の息吹」を自身の呪杖にカスタマイズする。武器アビリティに氷雪攻撃が追加され、名称も合わせて変更される。

「わぁ、名前が変わった。“雹呪杖（ひょうじゅつえ）・水花（みずばな）”という名前になるんだね。ぴったり」

「気に入ってもらえて嬉しいんだぞぉ～」

そのまま、彼ら全員は雑談へと入る。

今日行ったエリアとか取ったアイテムとか「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」関連の話題を話し合った。

ショップ「どんぐり」で賑やかにコミュニケーションが成立していた。

＊　＊　＊

どれくらい話し込んでいただろう。恐らく一時間くらいだ。そこまで彼らの交流は深く、話題は尽きなかっただろう。

その時に、シラバスのもとに一通のショートメールが届いた。

「あ、メールだ。……。……マスターに呼ばれた。倉庫の整理をするから今すぐ@Ｈｏｍｅに来てくれって」

「オイラの所にもきたぞぉ～」

「あ、悪いね。話し込んじゃったせいで、客が来なかったね」

エインが頭を掻きながらそう言うと、シラバスは「気にしないで」と答えた。

「じゃあ、店じまいだぞぉ～。三人とも、また来てくれだぞぉ～」

「ああ、また来るよ」

「またね、シラバスさん、ガスパー君」

「ありがとうございました。それじゃ」

シラバスとガスパーは“カナード”の@Ｈｏｍｅに向かって去っていった。

その場に残った三人は、今後の行動予定を話し合い始める。

「それじゃ、これからどうする？」
「うん……その武器、モンスターに試すか？　まだプレイ時間はあるし」
「そうね。じゃあ、適当に同じレベルのエリアでいいね」

三人はカオスゲート前に足を運んで、ナミの武器の性能を試すことにした。
――――ルートタウンにはカオスゲートがあり、そこからプレイヤーはログイン、サーバー間の行き来、冒険のエリアに旅立つ。ワードによるエリア自動生成システムを採用しているこのネットゲームでは、三つのワードを組み合わせることで、任意のエリアに転送できる。無論、他の人も同じワードを使用すれば同じエリアに行き来でき、別のグループに会うことだってある。
例えば、Δサーバーのルートタウン、マク・アヌのカオスゲートで「華やかな」「初陣の」「林道」という三つのワードを入力すれば、エリア「Δ華やかな　初陣の　林道」が生成される。こうしたワードの組み合わせは実に数え切れないほどあり、全てのエリアを巡る事は、一生では時間的に不可能だろう――――。
エイン達は適当にエリアワードを組んで、転送する。

WORD　1ー?　アップデート後の「世界」（後書き）

ここまで読んで下さり、有難う御座います。作者の蒼雷のユウです。

今回、第一話の前半ということですが、一足先に原作キャラが出てきましたね。やはり最初は彼らが盛り上げてくれる、だろうとカナードの二人が出演しました♪　正直、再現出来なのか不安ではありますが（笑）

・ｈａｃｋを知らない初見の方がたは如何だったでしょうか？この世界がどういう世界なのか、理解出来て頂いたら嬉しいのですけれど……何か疑問点がありましたら、遠慮なく感想欄に書いてくだされば、説明致します。

ほのぼのの前半に続き、後半は冒険編でバトルがあります。エイン達三人の仲の良さを実感させられるような微笑ましい内容です。

題名はそのままです。私の場合、題名に準じた内容が変わらないかぎりは、?・?と分けるだけです。今回は?ですので、当然後半の?があるということですね。

それでは、?にてお待ちしております♪

WORD　1ー?　アップデート後の「世界」（前書き）

※この物語は、ＰＳ２用ソフト「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」本編から数カ月後の世界が舞台です。初めて．ｈａｃｋの世界に触れる方の為に、随時解説を入れておりますが、物語の都合上、本編のネタばれ要素が入っています。．ｈａｃｋの世界をゲームで楽しみたいと考えている方は、ゲームを先にプレイするのをお勧めします。

　また、この作品は過去某サイトで投稿したものを加筆修正、改稿したものです。（そのサイトの管理者から許可は得ています）

WORD　1ー?　アップデート後の「世界」

WORD　1　アップデート後の「世界」

?

Λ　紅の　征服せし　荒野

適当にエリアワードを組んだエリアは、渓谷。
カオスゲートから転送されてきたエイン達三人は、直ぐに歩くと、早くも三体のモンスターに遭遇していた。
モンスター三体のレベルは三人のそれを超えてはいないものの、複数に叩かれれば無事では済まない。
だが、彼ら三人は熟練者である。どう効率よく戦えばいいか、熟知している。
事実彼らは、無駄なく時間をかけずにモンスターのHPを削り取っている。

「はあ！」

ナミが呪杖を勢いよく振るうと、三体居る内の一体の小型モンスターにダメージを与えられ、さらに凍結状態にした。

「任せろ」

ガイヤが双剣を取り出し、モンスターに攻撃する。凍結状態でも一応ダメージは与えられるようだ。
その後にエインの銃剣で攻撃する。クリティカルの表示が出て、

モンスターは消えた。

「エイン、後ろ！」

ナミが叫ぶ。

エインの後ろには二体目のモンスターが迫っていた。モンスターが武器を振るおうとしたとき、突進する影があった。

ガイヤだ。

「――“天下無双飯綱舞い”！」

双剣の連続斬りで敵の動きを止める。

その間にエインはスペルを発動するための照準をそのモンスターに合わせた。

「“塵球至煉弾”！」

銃による三連射によって、モンスターのダメージを削る。ＨＰが０になり、灰となって消えた。

この場のモンスターを殲滅し、戦闘が終了、経験値を得られる。

「やっぱりすごいよ。凍結させることで、動きを封じ込める。これで戦略の幅がもっと広がっていくね」

ナミは呪杖を仕舞いながら、嬉しそうに答えた。

「それに、雷属性は効果あるみたいだね。それでクリティカルが起きやすいんだ。水は電気を通すといわれているけど、氷も通すんだろうね？」

雷属性を付加した銃剣を持つエインはその武器を仕舞う。
彼は隣の幼馴染に知識の確認の為に話を振る。

「さあ、な。……氷は半導体で、水より抵抗値が高く通しにくいが、絶縁体ではないらしい。それに不純物が多いほど抵抗値は低くなるんだと。実験で分かったことなんだけどな」

ガイヤが双剣を仕舞いながら、自身が覚えている限りの電気の性質を口にして説明した。

（注：水や氷に電気を通すことは大変危険です。良い子も悪い子も実験という名目でも真似しないでね）

三人は再び歩き出す。
このエリアを隅々まで渡り歩き、全て徘徊しているモンスターを倒して、エリア最深部である獣神殿を目指す。素早く制覇する事が目標ではない。彼ら三人は止まらない程度に雑談を交わしながらエリア中を歩く。
だが、ここ荒野のエリアは丘陵や渓谷が存在し、また見渡す限り幅広い。歩くと言うよりは、うろつき回ると言った方が正しいだろう。全て壁に囲まれている洞窟や寺院のエリアと比べればマップ踏破は大分時間がかかる。
またこのようなエリアに長時間居続けると、「ドッペルゲンガー」と呼ばれるＰＣ（プレイヤーキャラクター）を模した黒い瘴気を纏うモンスターが現れる。これらは模したＰＣより常に高いレベルが設定される点や、常にＨＰ（ヒットポイント）、ＳＰ（スペルポイント）リカバリー、強力なアビリティを持つなど強敵だ。鏡を相手にするような感覚で、自分自身に打ち克つ事は容易ではない。通称“死を誘う者”とも呼ばれる。数多く出るモンスターの中で、最凶という称号を持つ。これらを避ける為、プレイヤー達は雑談目的でエリアに居座ったりしない。

エイン達三人も例外ではなく、雑談をしながらも足を止める気配は無い。ドッペルゲンガーが出現する時間までに歩きでエリア全体を踏破する予定で動いている。
会話している最中、ナミが話題を変えて自分たちのギルドの話に振った。

「私達がこの“スパイラル”を立ち上げてから、二か月以上は経ったよね。大分軌道に乗ったんじゃないかな？」
「そうだな。正直、俺達だけで運営できるとは、設立当時思いもよらなかったぜ」

ガイヤもその事を思い出したのか、複雑そうな心境で同意する。
苦笑いをしながらも、人差し指を立ててエインが“スパイラル”の盛況ぶりの理由を説明する。

「俺達だけでは、ここまではいかなかっただろうね。これも、二人程の加入者があったからだ。その影響は、より組織を盤石（ばんじゃく）にさせた。これが一番大きいと思うよ」
「あぁ。そういえば、数日前に新しい加入者が出たな。あれが二番目だったっけか」
「うん、二番目だよ。ガイヤ知ってる？　彼、貴方に憧れて入ったんだって。羨ましいね～」

私に対しても羨望の眼差しでギルドに入ってくれる人居ないかな、と少し夢見る眼差しでぼやくナミ。

「正直、どこで会ったかよく覚えてないんだがな。だが、憧れているってんなら、期待に応えねぇとな」
「意外と嬉しく照れているようだね。君が頭を掻くのは照れている証拠だぞ？」

「……微妙な癖に気づくな、お前。目ざとくおっかない」
苦笑いを浮かべて肩を竦めるガイヤに、嫌悪感の色はない。
エインは素直な友人に笑いで応える。褒め言葉を言われたように嬉しがるような表情だ。
「君の癖は昔から変わっていないようだからね。長年の付き合いなら目ざとくなくても、判るさ」
「だからこその癖なんだろうけどよ。矯正したいもんだ」
ガイヤの溜息に、ナミがなんで、と否定する。
「私はそのままでも良いと思うけどな。それが可愛いと思うし、むしろ良いキャラ点？」
「悪癖が良いってどういう基準だ俺のキャラ点！？」
ツッコミを入れるガイヤ。大きく戦慄くその仕草はオーバーなリアクションだったが、彼自身、人を楽しませることに向いていた。
彼が居たからこそ、エインとナミのプレイヤーを含めた三人の絆はさらに深まった。人生、苦しいことや悲しいこと、仲違いなどしなかった経験などは無い。
三人も例外ではなかった。昔、三人がある小さな事情で喧嘩（けんか）し、仲違いした過去がある。その解消に著しく貢献したのが、ガイヤのプレイヤー、和樹の人間性だった。彼が居なかったら、深い絆を構築することなく三人は今頃絶交していただろう。彼と接する内に、新二と奈美も喧嘩の原因はうやもやになり、全員が妥協したことで解消されたのだ。
ガイヤのアクションに、その時のように二人は笑みをこぼす。
「やれやれ。……そういえば、俺はエインと知り合った直後にナミ

とも出会ったわけで、二人は今も昔も変わってないようだが、二人は俺より前に知り合ったんだろ？　お互い、変わった点は無かったのかその時」
「ん……？」

急に話を振られた二人は呆気にとられたようだ。
否、エインは直ぐに普段通りの態度に戻り、考え込む。

「う～ん。確かに変わった点……は無かったような気がする。何時頃君と出会ったんだっけ、ナミ？　ガイヤと会う一年ぐらい前かな？」
「そうね、小学校に入学して直ぐだったかな。……お父さんの紹介で会ったんだよ」
「そうそう。確か君の父と俺の父は中学からの先輩後輩の付き合いだったんだって？　大学まで一緒だったって言ってたね確か」
「同じ教育者だったからかな？　大学卒業後は離れ離れになったそうだけど、エインのお父さんの中学同窓会の時に私を連れて行ったのが、始まりだったかも」

ナミはそこまで語ると、その当時の出来ごとを回想し始めた。

＊　＊　＊　＊　＊

――――十一年前。
私、南奈美は当時まだ幼稚園を卒園したばかりの子供だった。
その時、お父さんは関東地域で高校の教職員をしていたけど、福岡への転勤が決まって良い機会だから、と私とお母さんを連れて渡った。

それまでそこで仲良くなっていた近所の子と別れるのは悲しいものがあったけれど、やはり両親が一番好きだったから、惜しみつつもさよならを言って今までの家を空けた。
引っ越しの後、お父さんは引っ越し手続きを済ませた後、どこかへ電話をかけたようだった。その時は勤務先のお仕事と連絡を取り合っていたものと思っていたけれど、今にして思えば中学時代の母校で当時在籍していた時で一学年上の同窓会の日程を確認していたのだ、と。
電話から三日後、お父さんは私を連れ添って中学時代の母校へと向かった。お父さんの年代での同窓会ではなかった。お父さんと仲が良かった先輩の、一学年上の同窓会だった。だからそこにお父さんのクラスメイトは居なくて当然で。
お父さんは周りの人に恭しく挨拶して回った後、一直線にとある男の人に向かっていく。
その人は三十代後半になったばかりの人だっただろう。眼鏡をかけた、理知的そうな人にお父さんは声をかける。

「お久しぶり、先輩」
「……お、これは数十年ぶりだな。お前、どうしてここに……？」
「今日、ここで先輩の同窓会があると聞きつけたもので。会いに来たというわけですよ」
「ははっ、有難い話だが冗談はよせ。お前、関東の方で教師の仕事をしている聞いているが？」
「お聞きになってましたか？　自分は確かに関東の高校で教師をしていましたが、今年度からこちらの高校へと転勤に相なって」
「……成程な。最近は少子高齢化も進んでいるからだろう。団塊の世代も定年退職が相次いでいるようだしな。東京では教師が大勢いるが、地方はそうはいかんだろう。それで呼び出されたというわけか」
「そうです。俺としても、生誕の地に戻ってこられる事にこれ以上

にない喜びがありまして、有難く転勤の話を受けましたよ。ついでに言えば、ここに戻ってきたのはつい最近で、ここで今日、先輩の同窓会があると聞きました。先輩は忙しい立場ですから、会う事が出来る機会があるとすれば、この時が丁度良かった」

「……そうか。態々予定を調整させて済まなかったな。同窓会は一度きりでもあるし、級友たちに会える機会だ。……後は仕事がある。だが……よく来てくれたな、南」

歓迎するよ、とテーブルに置いてあったグラスを左手で持った男の人は、お父さんに手渡した。お父さんは喜んでそれを受け取って乾杯した。

お父さんとその人は聞いたところだと、中学時代からの親友という間柄だった。先輩と後輩という年齢差を越えた、お互いを理解しあえる親友だった、という事が雰囲気を見て私は理解できる。

その人の名前は、遠藤と言った。遠藤さんは研究者ということで、忙しい立場。同窓会の為に予定を調節して出席する事は出来たけれど、後日の仕事が詰まっているようで中々休めない人だった。お父さんはその事を知っていたから、今日の同窓会に足を運んだんだ、と私は思った。

歓談していた話題が一通り区切りを迎えると、ずっとお父さんの左手が何か繋がっている事に気付いた遠藤さんは視線を下に移した。お父さんの左手には私の右手をしっかりと握っている為、彼は私の存在に気づいたようだ。

「ほぅ、この娘は？　お前の子供か」

「あ、はい。俺の娘です。少しでもこの賑やかな場所に慣れさせようと、ちょっと連れて来ましてね」

そうか、と言って遠藤さんはグラスをテーブルに置くと私の背丈に合わせるように屈み込んだ。

その当時の私はちょっと怖くてお父さんの脚に隠れたけど、後にして聞くと遠藤さんという男性は子供、とりわけ女の子には優しい性格だったという。だから彼は、私に挨拶しようと屈み込んだ。
お父さんから頭を撫でられて「ほら、挨拶しなさい」と言われて私はゆっくりと前に出て、ぎくしゃくしながらお辞儀した。

「こ、こんにちは……。奈美、です」
「こんにちは。挨拶、上手いよ」

お父さんと同じく頭を軽く撫でられ、私は気恥かしさから再びお父さんに隠れた。

「ははっ、まだまだだな。中々しつけが行き届いているようだな」
「妻が主にやっていますけどね。俺は特に何もしてませんけれど」

苦笑いするお父さん。

「そうか……。今いくつなんだ？」
「幼稚園を卒園したばかりで、今五歳ですよ」
「では、小学校一年になるのか。……うちの新二と同い年だな」
「そうですか？　それは奇遇だ」
「……しんじ？」

嬉しがるお父さんに、私は首を傾げて尋ねた。
それには遠藤さんが応えてくれた。

「新二というのは、私の息子の名前だ。君と同じ年なんだよ、奈美ちゃん」
「……わたしと、おなじ？」

あぁ、と頷いて遠藤さんは立ち上がった。

「そういえば、彼女をどこの学校に行かせるつもりなんだ？」

「……そうですね。小学校から良い学校に入れるのは別に執着してませんし、徳岡小に通わせようと思っているところです」

「成程。家から近い小学校を選んだか。息子も同じ学校だ。どうやら、仲良く遊べる仲間がいきなりできそうだな」

そうでしたか、とお父さんは嬉しそうに笑う。

私は話の展開について行く事は出来ず、ただ首を傾げるだけ、だっただろう。

「……そうだな、この後家に来るか？　今のうちに紹介した方が良いだろう。何も良いものは出せないが……」

「良いですか？　それは有難いです。この子、幼稚園の時に知り合った友達と別れてしまいましたから、大分寂しがっていたんですよ。友達がこれを機に多く作れたら、いいものです」

お父さんは遠藤さんの話を了承し、大きく頷き返した。

夜に遠藤さんの家にお邪魔する事になったけれど、その時の私はやはり話を理解できずに、素直に何事かと尋ねる。

「お父さん？　これからどこかへいくの？」

「ああ。夜にね。この人の家に行くことになったんだ。彼の家族を紹介してくれるって」

頭を優しく撫でるお父さんを見上げると、呼ばれて屈み込んだ遠藤さんが私に向かって言った。

「私の息子と会わせようと思ってね。恐らく、君とクラスメイトに

なる。きっと行動を共にする機会が多いだろうと思う。仲よくしてくれたら、幸いだ」
「……えっと、なかよくできる？」
「ああ。彼と共に、友達を多く作りなさい」

遠藤さんはある種の頑なさを言葉にして言った。私は友達がまた出来る事に嬉しく思い、頷き返した。
その後、夜になってお父さんとお母さんと一緒に、遠藤さんの家族と出会った。その時に、エイン――――遠藤新二君と出会ったの。
最初友達を紹介する、って言った遠藤さん。その後その友達が私である事に驚いた遠藤君。まぁ、男の子ならまだしも相手が女の子だった事に驚いてしまったのかも。私も異性の友達は初めてだったし、ちょっと気後れしたところもある。
だけどその当時の私達は特に異性として意識してはおらず、平等の友達として接し、小学校の入学式を迎えた。
それから一年後に、遠藤君がガイヤ――――北原和樹君を連れてきた。
彼は遠藤君と違って、私に対して中々緊張して挨拶してこなかった。初めて出会い、そして異性ともなれば、恥ずかしく思うのも無理はない。最初は話が途切れがちだったけど、話している内に大分打ち解けられた。
ちょっぴり冷静で優しい遠藤君とちょっぴり恥ずかしがり屋だったけど楽しく振舞う北原君。私はそんな二人を気に入っていたし、好きでもあった。私達は小学校卒業まで三人で行動を共にするようになったんだ……。
うん。これが二人との出会いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

ナミがそのように昔を思い出していると、声がかかる。

「おい。モンスターと遭遇だ、戦闘用意！」

ガイヤは既に双剣を出して疾駆している。エインも銃剣を取り出して銃撃した。

一瞬の独考に反応が遅れたナミは三秒後には準備を完了させた。

モンスターは二体、共にギガゴブキャノン。一輪で動く機械。頭に二つの砲塔を備えており、また操縦者ゴブリンがいるコクピットを守る強固な装甲をもつ。だが、装甲が破壊されたら、意外に脆い事で知られる。それでも砲塔の威力は絶大であるが故、油断は禁物である。

ガイヤは二体の内一体を標的に定め、止まらず疾走。

ギガゴブキャノンの砲塔が近付けまいと火を噴く。発射される弾は容赦なく人間の身体を抉り取るだろう。

だが、ガイヤは最小限な動きでその弾を防ぐ。それも最小限の被害で動きを止めずに加速を続ける。

二発目も同じ、ガイヤは双剣によって防ぎ切り、そのままギガゴブキャノンへと肉薄に成功する。そのまま貯め攻撃で強力な一撃をその二つ同時に袈裟斬りで放つ。少しはヒビを入れる一撃はしかし、与えられたダメージは微量だ。

———ガイヤは守りに秀でていた。物理防御力を特化させている。彼が持つ自衛術は直撃を避けられる程の技量と能力を発揮する事が出来る。だがその分、攻撃力はかなり殺がれていた。彼の双剣「諒双剣・草裂（りょうそうけん・くさざき）」には、ナミの助言でＨＰとＳＰドレインのアビリティを装備している。先ほどの一撃で、敵のＨＰとＳＰを奪取、吸収して受けたダメージは巻き戻された。

本来、彼の接近にそれも攻撃力が低い双剣はギガゴブキャノンの装甲を破壊する事は出来ない。しかし、それは一体の動きを留める

事だけを目的に動いた彼は、無理に破壊する事もしないし倒される事は無い。何故ならそのドレインアビリティの効果により最小限に抑えられたダメージは回復し、与えるダメージを少ないけれども、少しずつ減少して敵を倒す事は可能である――――。

ギガゴブキャノンが張り付いたガイヤを振りほどこうと、回転する。

ガイヤは双剣で交差する事で、弾かれつつもさらにダメージ最小限。そして再び接近する。彼は既に敵一体との本格的な交戦に入っていた。それは足止めしているという事。

エインの目的はガイヤが相手している敵ではない。

もう一体の敵を倒すことである。ギガゴブキャノンは砲塔をガイヤへと向けられるが、銃声が響く。奔る黄色い雷光。エインの銃剣「雷銃剣・合点（らいじゅうけん・がってん）」の銃撃。

直撃を受けたギガゴブキャノンの動きが感電したように止まった。状態異常「麻痺」、相手の動きを止めるバッドステータスである。それは、電撃を浴びたような状態だ。

エインの銃剣には電撃攻撃の他に、麻痺を与える効果がある。彼の戦闘スタイルはガイヤとは逆に攻撃である。相手しているギガゴブキャノンを打倒しうる役割だ。

そして改めてエインは、アーツを発動して敵に覆われている装甲を破らんとする。

「“轟雷爆閃弾”！」

貫通性の弾を撃ち、それは目標へと一直線へ奔る。それは対甲攻撃であり、装甲を破る力を秘めている。

閃光は狂い無く着弾、装甲の耐久度を格段に減少させる。装甲は凄まじい防御能力を持っているが、ある一定の耐久度が設定されており、これが〇に達すると破壊されて中に攻撃が通るようになる。

目下、エインの目的は装甲を破壊し、ギガゴブキャノンを殲滅することにある。
敵の麻痺は続いている。エインは銃撃を続行しながら視線を逸らさず、口を開く。

「ガイヤ、そっちは大丈夫かっ？」
「問題ねぇ。さっさと倒しちまってくれよ、加勢期待してっから」

ガイヤは双剣を駆使し、ギガゴブキャノンの砲撃、回転による両輪の薙ぎ払いを凌いでいる。ＨＰも殆ど減らされていない状態だ。しばらくは任せられるだろう。
次いでエインはナミにギガゴブキャノンの情報の開示を求める。

「ナミ。相手の情報を教えてくれ。弱点属性を含め、全て」
「うん、えっとね……。ギガゴブキャノン、ゴブキャノンの上位族で連射が可能となった。ＨＰは約四六〇〇、装甲耐久は二〇〇、速度も下位に比べれば向上している。耐久属性は火と地、弱点属性は水。後……背後から攻撃すると正面よりは耐久度の減少が早い、だよ」

敵の詳細な情報データが彼女の口から滑らかに告げられる。
―――エインとガイヤの二人とは違い、物理的な戦闘が苦手なナミはしかし、情報戦に長けた人物だ。前もって収集したその細部に至るまでの情報を脳内に蓄積、状況に合わせて知識を放出する役割である。弱点を知る事は戦士の基本、情報は戦いを優位に運ぶために必要な定石。
その行動は仕事の内に入るだろうが、彼女のやり方は半ば趣味も入っている。
彼女が持つ知的好奇心は深い分野まで調査する上では欠かせないものであり、情報分野への道を目指しているのであれば至極当然だ。

このネットゲームをプレイする彼女は、モンスターのデータの他に、他ギルド、注目されているＰＣ、世界観、歴史に至るまで深い分野も集積させている。

「了解。助かる。素早く倒す戦法で行くから、援護を頼むよ」

分かった、とナミからの返事を聴く。

ナミの髪がふわりと揺れる。魔法を発動させる。

「“アプコーマ”」

魔法攻撃力をアップさせる強化魔法を発動させる。

エインのＰＣにきれいなエフェクトが降り注ぎ、魔力のステータスが“強化”される。

彼女の次の準備が整うまで、エインはアイテム欄から一つのアイテムを選択する。

「呪符」。魔法職ではない戦士でも、魔法を発動する事が出来る消費アイテムである。

「“粋竜演舞（オルリウクルズ）の召喚符”」

封印された魔力を開放させるエイン。目標を固定する為の照準――魔法サークルがエインから伸び、ギガゴブキャノンへとロックする。

直後、足元から膨大な水量が発生し、猛々しく跳ねる。激しい水流はまるで二匹の龍が敵を噛み砕こうとする様（さま）だ。

――――属性には八つの要素がある。火・水・地・風・氷・雷・光・闇の八要素。それぞれには相克関係がある。火は水に弱く、水は火に弱い。水相手に地で攻めても大して意味がない。

属性は各々の身体に宿った魔力によって、敵の攻撃を軽減させる

力がある。それが八要素のどれかを使っている以上、弱点は存在していた。
ギガゴブキャノンは火属性を結界にして守りを高めていた。それを打ち破る相克関係である水は、その結界を突き破り、本来のダメージを負わせられる。
装甲に圧迫するほどの水量が流れ込む。装甲を老朽化させたように、耐久度は格段に落ちる。
その間に、ナミの物理攻撃力アップする“アプコーブ”で強化されたエインは疾走を開始。徐々に距離を詰める。
ギガゴブキャノンが報復とばかりに砲塔から弾丸を発砲する。回避する時間などは無く、エインに直撃し、ＨＰは大きく減少。

「――――“オリプス”」

ナミが回復呪文を唱え、エインのＨＰは元に戻った。

「助かるよ、有難う。そのまま援護を！」

エインは疾走を再開。ただ接近するのではなく、回り込むようにギガゴブキャノンとは平行に移動する。
二発目が発射されようとするが、今度は着弾しない。真横に移動されれば、直線を走る弾丸が命中する道理など無いからだ。
ナミの最後の強化呪文が唱えられる。

「“アプドゥ”！」

移動速度をアップさせるエフェクトがエインへと注がれる。直後、彼の疾走がさらに加速した。
その速度、最早射撃で当たる事は無い。彼は一気に敵の後ろへと回り込む。

回り込んだ後、斬撃。二撃、三撃、四撃。五撃目で銃口を向けてトリガーを引き、銃撃。
強化された攻撃力に、ギガゴブキャノンの装甲は崩壊、内部が露わとなる。ＨＰは大きく減少する。対抗しようと両輪による薙ぎ払いを行ってエインのＨＰを減らすが、ナミの回復魔法で修正される。
報復とばかりに、銃剣の溜め攻撃。ギガゴブキャノンを大きく吹き飛ばして反撃の手を止めさせる。
無防備な敵に、止まない弾雨が降り注ぐ。轟く銃声は、ガイヤが振う双剣の鋼の音を掻き消すほどだ。
ギガゴブキャノンのＨＰは残り僅か。彼は、アーツを発動させてトドメをさす。

「“塵球至煉弾”！」

大きく退いた敵に、三つの強力な光弾が降り注ぐ。
ついに、一体目のギガゴブキャノンのＨＰが〇になる。

「よし、やったぞ！」

塵と化して消える敵。
残りはいまだ健在に防御を専念しているガイヤと、彼の与えたダメージが確実に少しずつ蓄積している残りのギガゴブキャノンだ。

「おう、やったか！　こっちはすこぶる順調だぜ。が、手っ取り早く倒すには一人じゃやはり無理だ」
「良いよガイヤ。それが君の戦闘スタイルなのだから。良く堪えてくれた。今加勢する！」
「こっちも攻撃に変えるよ。――“リウクルズ”！」

圧迫するような水流が、ギガゴブキャノンに飛びかかる。

エインはその間に接近、ガイヤはそれまで防御に専念。そして、装甲を破壊した後は三人で袋叩きという結果だ。
素早い速度で懐に入り攻撃でＨＰを削るエイン、一方を引き付け巧い防御で耐え凌ぐガイヤ、強化呪文と回復呪文で援護し敵の情報を伝えるナミ。
この三人が、“スパイラル”の主要メンバー、そして依頼達成率が高い水準で維持させている陣営である。この戦法は互いの利点を大幅に活用し、弱点を補うもので、殆どが武具に装備されたアビリティに依存している形。それはアビリティコレクターでもあるナミが発案者であると言ってもいいだろう。これは仲間同士の連携プレイがなければ成り立たない戦法であり、彼らが深い絆で結ばれた、仲の良い幼馴染という事が理解できるであろう。
全てのギガゴブキャノンをほぼ無傷で倒すことに成功し、エイン達は経験値を得て武器を仕舞った。

「ふぅ、お疲れ様二人とも。援護、感謝するよ」

エインが穏やかな笑みを二人に向ける。

「気にすんな。これしか俺にはないんだしな。攻撃は殺がれちまってるしな防御で（汗」
「それを補助できるのは私だから、大いに役に立っていると思うよ私。この陣も中々いい線いっているし♪」
「だね。これは、俺達三人が掴み取った勝利、というわけだ」

三人は改めて両手で、囲む友人達に向かってハイタッチ。笑顔でお互いに勝利を讃え合う。
リザルト画面を確認した後、エインは歩き始めるが、唐突にガイヤの声が飛び、足が止まる。

「――でさ、何だっけ？」
「え。何がだいw」
「あぁ～と……そうそう、同窓会を介して二人は知りあって、一年後に俺はエインとナミに出会ったわけだよな。で、その前に性格はそのままだったのか、って話だった」

ガイヤは先程の二体のモンスターに遭遇する前の話を蒸し返すように思い出していた。

「……あぁ、そのはずだ。まぁ、若干あの時は異性と友達になるのは若干抵抗あったみたいだが、話せばそんなこと関係なくなったなぁ。性格は、今のと殆ど変わってないだろう？」
「うん、そうだね。自分で言うのもなんだけど」

エインの確認に、ナミが苦笑いで答える。
深く何度も頷くガイヤは納得気に、

「そうかそうか。エインは大分冷静になって少し変わったが、ナミの性格は筋金入りというわけだな！」

と、軽々しく結論づけた。

「し、失礼だねっ！　私だって、ちょっと変わってるんだよ！」
「ほぉ？　具体的にはどこら辺がだ？」
「……それは……背が、伸びたとか」
「それは性格という内面じゃなくて外見だよなぁ！？」

あまりの見当違いに、さしずめガイヤもツッコミを入れる。
ナミは物足りないように、自分の利点をさらに述べる。

「他にも包容力が大きくなったと思うよ？　聖母マリアみたいに慈愛の笑みを浮かべて、私は人の心を癒やすんだよ」
「それは信仰対象になるね、君は……」

エインもツッコミ役に回る。冷や汗を流し、彼女を止める術を思考開始。しかし、結論まで長時間要す。
意地になったように、自分の利点をさらに探し出して、力説するナミ。

「そうそう。後はあれだよ……！　私、二人と出会った時と違って、あまり人見知りはしないんだよ。どんな事にも積極的！　友情も、勉強も、恋愛も！　中々良く育ってない？」
「肉食系女子！？　つーかナミ。お前、恋人とか好きな人はいるのかよ？」
「え？　それはまぁ……今は居ないけどね（苦笑）」
「居ないのかよ！　最後のは嘘かっ」
「う、嘘じゃないよ。いつかは見つけるよ、好い人をっ。今は色々情報集めたりとか、将来に向けて空いた時間は猛勉強中だからその気分じゃないだけで……」

次第にしどろもどろになるナミ。
そこに斬り込むように、エインは一声。

「君は情報が恋人だねそうなるとさ。相変わらず嘘は苦手か、ある意味正直だよ。……まぁ、過去の事は良いじゃないか？　今大事なのは、現在成長した俺達なんだから」

その言葉に、ガイヤとナミをこくりと頷く。

「そうだな……。あ～あ、やっぱ三人とも、根本的な部分は昔と変

わってねぇわけか」
「変わってたら、それこそ何だか昔と違うみたいで、ちょっと嫌だけどね」
「それもそうだな。むしろ、そのままがありがてぇぜ」
うん、とエインは力強く頭を振り、足を動かした。
「そろそろ行こうか？　大分時間が経っているようだし、もう残りのモンスターも少ない筈だ。一気に倒して、獣神殿に到達しよう」
おう、うん、と二人もエインの後に続き、次のモンスター討伐に向け、足を速めた。
一通り、武器の実験を終えると獣神像に辿り着き、宝箱を取った彼らは、ルートタウンに戻るのだった。

＊　＊　＊

Λルートタウン　「マク・アヌ新市街」

エリアとタウンを繋ぐカオスゲートから転送されてきたエイン達三人はしかし、その場から動かず、リアルの時刻を確認する為その場に留まり、近くにあるセーブ屋に寄る。
――「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のＰＣデータセーブは他のネットゲームと違い、特殊だ。普通、冒険エリア内であってもログアウトすれば自動セーブされ、再びログインすれば最後にセーブしたところから再び始まる。だが、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」はその機能がない。全てセーブ屋による手動で行われる。セーブせずにエリア内で

ログアウトすれば、エリアで手に入った経験値、アイテムなどが失われ、最後にセーブした状態で始まる。ある一定の例外を除き、強制ログアウトは中々できない。だが、この時代のネット環境は飛躍的に向上、普及している為、通信障害、通信シャットダウンなどで回線が切れる事は稀だ――――。

三人はセーブを終えた後、向かい合う。エインが告げた。

「じゃあ、今日はこれまでだね」

リアルの時間は午後十一時。明日も学校があるのでそろそろ落ちる時間だろう。

「ああ。じゃあ、また明日な」

「うん、またこの世界で会おうね」

ガイヤ、ナミがログアウトし、エインもログアウトして世界から出た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

エインのプレイヤーである新二はＭ２Ｄが停止したことを確認した。ディスプレイには「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のメニューがある。

新二はＱｕｉｔを選択して「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」を出る。メインディスプレイに戻り、コンピューターを終了しようとしたとき、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」と連動しているメーラーにメールが届いた。

「なんだろう、こんな時間に？」

新二がＭａｉｌ　Ｓｔａｔｉｏｎを開き新着メールを確認する。

＊

送信者　ＣＣ社
件名　新闘宮開催のお知らせ

エイン様

平素より「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をご愛顧頂き、誠に有難うございます。
この度、新闘宮「鳳天宮（ほうてんきゅう）」の開催をお知らせいたします。
先に特別ディレクターによって開催されました「竜賢宮」のＰＫトーナメントについて、数多くのプレイヤーから非難されることになり、弊社（へいしゃ）とも大変遺憾に存じております。
弊社はそのイメージを改善しようと大幅アップデート、新たなサーバー、ＬＶ上限ＵＰ、新たなアイテムの追加などを行い、少しでも皆様と「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をより良くしてきました所存です。
そして、新たなる闘宮開催を豪華な賞品と共にご用意しました。

まず、この新たなる闘宮「鳳天宮」に宮皇枠（チャンピオン）を決めることになります。ご存知の通り、「鳳天宮」は作られたばかりで、チャンピオンは空座であります。ここで優勝されたチームは世界最初の「鳳天宮」チャンピオンという非常に名誉ある座を手に入れることができます。
さらに、初優勝商品限りでエリア作成権を弊社から優勝者に与えようと思っております。勝者の方は一つエリアを自由に作れることができます。弊社のグラフィッカーが要望通りにそのエリアをお作り致します。
世界で一つのエリアを作って、お仲間と一緒に旅立たれてはいか

がでしょうか。

残念ながら、プレイヤーのＬＶ制限は一五〇〜二〇〇となっており、それ以外は出場できませんが、チーム名とメンバーをあらかじめ登録していただければ、次回の大会で決勝トーナメント出場の優先権が与えられます。データは保存させていただきますので、心配はございません。

その他に制限はございませんので、興味と腕に覚えがある方はぜひご参加ください。

ルールは通常通りですが、今回限り、三回戦以上の進出の敗者チームを対象に再びトーナメントに復帰できる敗者復活戦が敷かれております。

出場する方はメンバーとリーダーを揃えて、ルミナ・クロス受付で出場登録を致してください。

また、数多くのチームが出場できますが、規定数以上の出場者が出た場合は抽選によって決定させていただきますのでご了承ください。

闘う者も観戦者もこの熱き戦いに酔いしれてみてはいかがでしょうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

万一、このメールにお心当たりの無い場合は、お手数ですが、弊社カスタマーセンターまでご連絡ください。

＊

Ｔｏ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

ＷＯＲＤ　１ー？　アップデート後の「世界」（後書き）

次回予告

新たな世界に加えられた人々の集まり、共に存在を確認しあい、戦う場所、闘宮。鳳凰の名を冠した天に近づきし者達。皆が興味を持つこと十分。人は、常に上を目指すのだから。それでも勝者は一人。

三人はそれぞれの思惑を持ち、闘宮に出るのだろうか？　世界を導いた子供達、そして君臨し続けた王者達は？

プレイヤーはまた一つの文字を入力する。

Ｗｏｒｄ　２　新たなる闘地　「鳳天宮」

人々が集まりし、新たなる闘宮に、どうか幸せを……

＝＝＝

ここまで読んで下さり、有難う御座います。作者の蒼雷のユウです。　第一話、如何だったでしょうか？

分かりやすく、読みやすく、面白く書いたつもりです。まだまだ序章なので、今はほのぼのが続きますが、徐々に「Ｇ．Ｕ．」と関係してくる物語になってきます。

夢、リアル、ネット、冒険……今回はそんな話だったですけれど、次はアリーナ関係になってきます。是非お楽しみに♪

批評はいつでも受け付けています。良い点は勿論、もし悪い点がありましたら申し出てください。修正いたしますし、失敗は成功のもとと言います。その悪い点を反省して、より素晴らしい作品を作ります。

この作品が、あなたの心に響く事を祈りつつ……。

ＷＯＲＤ２ｌ？　新たなる闘地　「鳳天宮」（前書き）

※この物語は、ＰＳ２用ソフト「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」本編から数カ月後の世界が舞台です。初めて．ｈａｃｋの世界に触れる方の為に、随時解説を入れておりますが、物語の都合上、本編のネタばれ要素が入っています。．ｈａｃｋの世界をゲームで楽しみたいと考えている方は、ゲームを先にプレイするのをお勧めします。

　また、この作品は過去某サイトで投稿したものを加筆修正、改稿したものです。（そのサイトの管理者から許可は得ています）

WORD2ー？　新たなる闘地　「鳳天宮」

WORD2　新たなる闘地　「鳳天宮」

ガタンと扉が閉まった。

少年は、開けようとしたが、入れない。どのくらい力を入れても、入れない。奥には人影があった。

そんなにハッキリと、ではないが、ぼんやりと灯のように揺れているのがわかる。

「ねえ、開けて。開けてよ！」

そう、ドアの向こうにいる人間に尋ねるが、聞こえてくるのは僅かな笑い声だけだった。

外には誰もいない。全員が中に入っているのに、自分だけが中に入れない。

少年が感じたのはまるで、自分が空気になった気分だ。自分が仲間はずれにされた気分だった。

「どうして、扉を閉めるの？　ねえ、開けてよ！　皆、聞こえるんでしょ？　開けてくれよ！」

返事はない。

いくら力を込めても一瞬扉が開き、そして直ぐ閉まった。誰かが、扉を押さえているのだ。

異端者は取り除かれるように。網戸を締めて害虫を入れないように。

「開けてくれったら！」

遂には強くノックする。それでも反応は無い。
果たして、彼は意を決して力を込めた。

「開けろ！」

力強く扉が開く。バン、と勢い余って音を廊下に響かせた。その時、扉の奥で誰かが倒れる音がした。
扉の奥には、驚いて尻餅ついている男以外は全員、自分の決められた位置についていた。
恐らく、この尻餅ついている男が扉を閉めていたのだろう。
学生服を着た少年はそのまま中に入り、黙って席に着こうとする。
だが――――。

「なにしやがる、てめぇ！」

尻餅ついていた男が急に立ち上がって、少年の側面から手を伸ばし、彼の胸倉を掴んできた。
急な怒声、急な行動、急な異変。何もかもがおかしかった。何故、彼は怒るのか。少年は理解できなかった。
男子生徒は胸倉を掴みながら、部屋の端に移動した。そしてその相手を、壁を前にして叩きつける。
少年を睨みつける男の貌は、怒気に溢れていた。

「な、なんだよ……」
「なんだよじゃねえだろ！　急に強く扉を開けて、俺が指を怪我しそうになった挙句、謝りもなしに通り過ぎようなんていい度胸してるじゃねえか！」

彼は理不尽に怒っている。

この男が人を入れるのを拒んでいたというのに、何故、この男は怒るのか理解できない。怒りたいのはこっちだというのに。
いつの間にか、部屋にいた男子生徒達が少年の周りに集まってきた。

「な、何言ってるんだよ。扉を閉めたのはそっちじゃないか。明らかに開けようとしているのに。どう考えたってそっちが悪いだろ？」
「お前こそ何言ってんだ？　俺はついさっき部屋から出ようとしたんだ！　大体、俺はそんなことしてねえし、だれもしてねえんだよ！　ドアの調子が悪かったんだろ？　……なあ、そうだよな？」

彼がそう訊ねると、周りの男達が彼を庇う様に同意した。その仕草は明らかに不自然だ。

「そんなはずないよ。窓の奥にはちゃんと人影がいた！　それに、なんで今出ようとしたんだよ！　今から授業じゃないか！」
「別に授業前にトイレに行くことは、いいじゃんか。それともお前は俺に授業中、モらせとでも言いたいのかい？」

周りの男達が失笑する。
少年がよく聞くと、この部屋――――この教室にいる人たちは笑いを堪えているようだ。

「それに、人影は恐らく太陽が、遠くにいる人を照らして扉の窓に映してたんだろ？　それを近くに人がいるという勘違いするものさ。それより、ほら、謝れよ……」
「……はぁ？　な、何を言って――――」

どう考えても適等を並べたような理由。どう考えても責任転嫁。
どう考えても嵌められたとしか言いようが無い。

まるで誰も無害で、自分だけが悪いことをしたと害のような扱いだ。

「どうしたよ？　ほら、謝れ。服も汚れちまったし、扉の間に手を挟まれそうになったんだぜ？　ほら、『ごめんなさい』は？　……あぁ？」

周りの男達が一斉に「謝れ」「ちゃんと注意して開けろよ」「怪我はさせるな」と口々に言ってくる。

――――謝らない。

だってどう考えたってあちらが悪いんだ。自分を入れさせず、扉を閉め切ったのはそちらなのだ。皆だって見てたはずだ。それならなんで皆は何も言ってこない。

このまま、謝ったらそれで解決されてしまう。事実無根だけは、認められない。

少年は沈黙を貫ける。

「ほら、謝れ。謝れ、謝れ、謝れ。どうした、聞こえないんだけど？　怪我しそうになったんだぜ？　……おい、聞いているのか？　謝れっつってんだよ！！」

胸倉を掴む手はますます強くなる。

何で、誰も言ってこない？　どうしてだ。皆は見てたはず。自分は大きな声で呼びかけたから無視できなかったはずだ。誰かしら、自分を助けてくれるはずだ。

少年はそう信じているから。

「お前、普段は大人しいが、本当はすっげーワルなんじゃないの？　教室から出てくるところを見計らって、強く扉開けて怪我させようとするなんてさ」

周りを囲む男の一人が何気ない言葉を放った。
それで少年はカッと頭に血が上った。
「やってないものはやってないんだ！　自分はそんな気はないし、悪いのは閉めたキミなんだ！　悪くない、自分は何もやってない、やってないんだ！」
教室中に響くほどの大声を張り上げた。途端、教室中が静寂に支配される。あの大声では、きっと隣の教室にも響いた事だろう。
だが、少年はそれでも構わない、と思っていた。
それにしても。彼らは普段はおとなしいのに、先生が周囲にいないと、こうも変わるものなのだろうか。しかし、これなら自分の熱意が皆に伝わったはずだ。これで、誰か一人ぐらい……――――。
だが、少年の願いと弁解は一笑にふされる。
「――――ぷっ、何だこいつ！　急に叫んで、『僕はやってない』なんて、熱っち～。何熱くなってんだこいつ～」
周囲の男達がこれでもか、というぐらいに笑い出した。
なんとでも言え。自分は悪くないのだから、と少年は嫌悪感を抱きながらも口に出す事はせず、事態を見守る。
少年が睨み返すと、彼の胸倉を掴む男子学生の握力がさらに強くなり、呪い殺すほどの双眸を向ける。
「くだらねえことはいいから。さっさと謝れよ。お前は良くともこっちは怪我しそうになったんだぜ？　仮にお前の場合はドアの調子が悪かったから開けられなかった。それだけのことだろ？」
「そうだ、そうだ！」
「どちらが悪いかなんて、誰でも分かるよなぁ」

「ほら謝れ」

そう男達は口々に言い放った。

どうしてだ。これだけ誠意を払っているのに、誰も自分を助けてくれない。皆、自分を信用していないのか？　自分はこんなに信用しているというのに。あんなによく笑い合って、仲良くしてきたのに。少年は次第に焦りを覚え始めた。

彼は、幼さ故に理解できない。

「おい、謝れっつってんのがわかんねぇのか！？」

男が胸倉を掴む腕をさらに伸ばし、少年は頭を壁にぶつけた。

彼の視界が若干歪む。視界に映る男子生徒達の貌が一斉に歪んだが、きっとそれは嘲笑を表しているのだろう、と思った。

「そいつ、馬鹿なんじゃない？」

「そうだぜ、自分の運の悪さを人の所為にしようなんて最悪だ」

「ただ、ごめんなさいって一言いやぁ、それではい、おしまいなのにさぁ」

「謝れよ、こら」

周りの罵詈雑言の中、少年はただある一つの希望に縋(すが)りつく。

そうだ。ただ一人、助けてくれる人がいる。あの人は、才明で、清楚で、優しいあの人なら、きっと自分を助けてくれる。あの人は優しい人なんだ。この事態に嫌悪感を示し、この人たちを屈して止め、自分を助けてくれる、と。

少年はそう願い、胸倉を抑えられている状況で必死に頭を動かす。そして、男達の隙間に同級生達が映った。

その奥にあの人が見えた。自分が唯一そうなりたいと目指し、尊敬した人に。そして一人の———

「あ……！」

そこに映ったものは……――――

「――――っ……くそっ。またか……」

カーテンから差し込まれ、暗闇を逃す自室のベッドの上で青年、遠藤新二が放った今日の第一声はそれだった。

また、夢を見た。

何故かは分からないがまた悪夢だ。

今度のは、思い出したくも無い忌々しい。数年前の。最近はこういった夢をみることが多くなってきた。気分が良くなる夢なんて、殆ど見る事が少なくなっている。

原因は何だろうか、そもそものきっかけはいつ、どこで、どのような事からだったのか。

――いいや、考えても仕方ない。

そう新二は思考した。過去は振り返らない主義だから。今がよければいいのだ。それが、より良い未来に繋がればよいのだと。

彼はそう考えている人物だった。

＊　＊　＊

「ねえ、聞いた？　今度開催される『鳳天宮』の話」

「ああ、なんでも優勝者はエリアを一つ作っていいってやつだろ？」

「いいなあ。うち、まだＬＶ一二三だから、出場資格無いや」

「一二三って……何時の間にそんなにＬＶＵＰしたんだよ？」

新二が学校に来たとき、クラスではネットゲーム「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」の話でもちきりだった。このクラスの生徒の過半数は「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイしている。勿論、昨日届いた「鳳天宮」開催通知メールは全員に届いていたらしい。

同じ「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイしている新二にとっては共通の話題だがしかし、話に加わろうとしない。いつも通り、黙って席に座る。

新二が「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイしているなんて誰にも言ってないつもりである。言ったら会話が弾むかもしれないが、彼はその気すらなかった。

しばらくして教師が到着し、授業が開始される。

今まで通り同じことの繰り返しで、午前は睡魔と戦い、午後は授業との戦い。

そして、学校が終わり、普通に帰宅する。
帰った後は宿題と予習をし、夕食をとり、そして「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイする事が新二の日課である。

コンピュータを起動。
デスクトップが開き、メールを確認した後にネットゲーム「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をクリックする。読み込み画面の後に、キャラクター選択。「エイン」を選択し、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のメインメニューが開かれ、Ｌｏｇ　Ｉｎを選択する。
そして新二は今日も世界に突入した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

？

Δルートタウン　悠久の古都「マク・アヌ」　傭兵地区　ギルド“スパイラル”@Ｈｏｍｅ

「なあ、昨日メール来たか？　『鳳天宮』の話」

@Ｈｏｍｅにエインが着いて早々、共に居たガイヤが目を光らせながら言ってきた。
そら来た、とエインは思いながら、適等に返事をする。
「ああ、届いたぞ。それがどうしたんだい？」
そう言って、近くにいたギルドメンバーに挨拶する。

――“スパイラル”は小規模ギルドのため、人数も少なく、マク・アヌに籍を置いている。
このギルドの主任務は傭兵活動――といっても、この「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」内では傭兵活動しているギルドはごまんといる――だ。
ただ、そんなに依頼が入ることは時々でしかなく、その時は様々なＰＣ――その中には、時々外国人ＰＣ――とコミュニケーションを図り、相場を計算、演説を開いたり、リアルで必要になる能力を養うこともするギルドである。無論、資金の使い道は今後立てるギルドのために使うものである。
全体人数は主要の三人を入れて、合計五人ギルド。それぞれ、役割分担を決め、仕事に当たっている。
エインが先ほど挨拶したメンバーは最近加入した新人の魔導士。現在主に、任務の受付、整理をおこなっており、新人はそういう基本的なところから仕事をする。
ここにいる全員はそういう仕事をこなしてから活動を始めたのだ。大分慣れてきたら、任務の参加を許可されて、任務に行くことができる――。
依頼が来てないかメールの確認をしている最中のエインに、ガイヤは腕を組んで、考える仕草をしてから尋ねる。

「優勝者にはエリア一つ与えられる話、本当なのかね？」
「……だとしたら、どうする？」

質問を質問で返す。その返事は、エインもエリア作成という仮説が薄々と現実味を帯びさせることになる。無論、彼もそれが本当であれば実に良いと思っているが。
ガイヤの答えは分かっているが一応何気ない表情で確認をとる。この男は世界でただ一つだけあるというレアなものの存在を聞くと、必ずそれに興味を示すからだ。

だとしたら……――――。

「『鳳天宮』に出よう！」

――――と言うに違いないのだ。

ガイヤは、エインが思考している時とまったくの同時にそう宣言していた。

「君な……」

エインは呆れた顔で、振り返る。

何か間違ってんのか、と言いたいようにガイヤは躊躇いなく諭す。

「いいじゃないか、どうせこの手のメンバー合わせ依頼は来ないし、開催されている間俺達に依頼なんてきやしないさ。皆、観戦に熱中してさ。……現に、暇で暇でしょうがねぇ」

「……出場しない者も居るし、興味が無い者だっている。その例外から依頼が来るかもしれないけれど……何が目的だい？」と、片眉を潜めるエイン。

乗り気そうではない幼馴染を気にする素振りを見せず、陽気に、決意を秘めた眼でガイヤは回答する。

「そりゃもちろん、優勝。優勝したら世界で一つのエリアを作れるんだぜ！　これ以上のレアは存在しねぇし、唯一のチャンスだぞ！　世界で俺だけの一つ……！」

彼は、優勝も出場も決っていないのにどのようなエリアを作ろう

かと、既に妄想に耽っていた。好奇心旺盛な男なのだ。
せめて将来インディージョーンズみたいになってどっかに冒険してしまえばいいのに、とエインは心中で毒を溜めて、首を振る。

「却下」

エインはそう、断言した。
自分達の活動意義を忘れてはならないからだ、とエインは考えているからである。

「えぇ〜。なんでだよ〜」

ガイヤは驚いた顔で、エインに詰め寄る。
彼は珍しく抑揚なく答える。

「俺達は彼ら後輩のために、鑑でなくちゃいけないんだ。それに、仮に出たとしても、出場している最中、緊急依頼が入ったらどうする？　君は出場放棄して、任務を全うするか？」
「まさかぁ〜、ないってそういうのは絶対」
「絶対といえることはない。世の中はそういうもんだろう？」
「だけどさ〜」
「とにかく、出ないからな。依頼が来るまで待て。その内、誰かしら人数あわせでアリーナに出てくれと依頼してくるだろう……」

エインは彼に背を見せ、片腕を上げて奥に向かって歩きだす。
ガイヤはそれ以上反論する気はなく、顔を膨らませていた。
子供か君は……？　と、エインがため息を漏らしたその時、その話に対して乱入者が現れた。
その人物は意外なことを口にする。

「あら、好いんじゃないの？　たまには、はめを外しても」

ナミだ。

まさか彼女がこう言ってくるとは予想外だ。こういうことは普通乗らないのに。

エインは彼女の提案に驚きを隠しきれず、狼狽した様子で振り返った。

「ナミ？　……まさか、君、『鳳天宮』に出たいのかい？」

「うん、エリア作成には興味があってね。それにこの子達だって、たまにははめを外して、休ませるなりしないとリコールされちゃうよ」

この子達とはエイン達の後輩、二人の新規メンバーを指しているのだった。

「よっしゃぁ！　支援者一名追加！」

ガイヤは仲間が増えたときて大はしゃぎだったが、ナミが笑顔で、

「いえ、別に貴方を支援してるわけじゃないから」と、補足。

「がい～ん……」

ガイヤは半ば演技のように落ち込んだ。

「ねえ、エインも出ようよ。三人いればきっと百人力だよ」

ナミがエインに近寄り、笑顔で迫ってきた。

彼女の賛成の意思に動揺しつつも、逃れるように顔を背ける。

「ナ、ナミまで……。いや。とにかく、俺は無理だよ。エリアなんて興味はないし、ＰＫを促進するようなアリーナには出たくないから」

そう言って、彼らに背を向けて歩き出す。それで彼ら二人が納得しないのは、長い付き合いのエインも判ってはいたが、自分の意見はハッキリと伝える性分だから仕方が無い。

だが、こういう交渉術に対して、絶対にナミを敵に回してはいけない恐ろしさを、改めて彼は思い知る事になる。

「アリーナっていったら、やっぱり“イコロ”の太白は出場するのかな？」

ナミが不意に喋ったことが、エインの動きを止めた。

――“イコロ”はアリーナチャンピオンだけが入ることを許可される、至高のギルドだ。そのためアリーナの数だけ人も少なく、だが誇り高く強き者が集うギルドで有名であり、その功績から特別にアリーナがあるルートタウン「ルミナ・クロス」に@Ｈｏｍｅを構えている。

太白はその“イコロ”のギルドマスターで、有名な銃戦士として知られていた。昔は「竜賢宮」の宮皇だったのだが、先のＰＫトーナメントで現宮皇に破れ、現在は無名となっている。しかし、「鳳天宮」が開催される前の最高アリーナ「竜賢宮」の宮皇と言う事は事実上、最強の称号に近しい立場だ。彼は、そこに立っていたのだ。

その頃から、@Ｈｏｍｅから姿を消し、現在は試合を観戦したり、町を散策したりなど、傍観者の立場をとっている。

恐らく、太白は新闘宮の開催に興味を示し、出場してくるだろうとプレイヤーの大半が思っている。

ちなみに三連覇をなしとげた現宮皇は“イコロ”の@Ｈｏｍｅに興味はないらしく、現在の“イコロ”は留守状態となっている。

エインの動きを止めたナミは、さらに追撃をかける。

「太白が出場するとなれば、このチャンスは見過ごせないよね。最近は試合にも出ないし、エリアに出ることもないから決闘を挑むことができる機会なんてない。……あ、そういえば、誰かさんが言ってたなぁ……。いずれ、太白と戦ってみたいって。だったらこの機会逃したら、もう二度とできないかも～」

にやりと口元を釣り上げて、彼女にできる誘いの目つきをエインへと向ける。

（こ、この……。わざとらしいのは見え見えだけど……！　否定できないっ）

眉を引きつらせ、言葉を絞りだせないエインは見つめ返すしかない。

反論できないその理由は昔、エインが言ったことは事実だからだ。彼は一度でもいいから、太白と戦ってみたかった。どんな技を出すのか、自分の技にどう対処するのかを興味本位に知りたかったのだ。好戦的というわけではないが、自分より強い者と手合わせする事は、殆どのプレイヤーが思うところだ。知的好奇心を御する術は無い。

ナミは彼の心理を操り、出場させようとしているのである。過去、エインが語った情報を武器に。既に主導権を握っているのは、エインではなかった。

「……！　……成程、そうだな～。誰にも邪魔されず戦うというなら、今がチャンスだよな。イコロが出場したら、まず間違いなく優勝するだろうしな。勝ち続ければ、必ず当たるぜ」

ガイヤがナミの意図を察し、口裏を合わせる。

それと同時に、途中から@Ｈｏｍｅに入室し、その話を聞いていたメンバーの一人、斬刀士の女性ＰＣが駆け寄ってきた。

「え。……マスター、アリーナに出るんですの？　いいじゃないですの！　わたくし、アリーナで戦うお三方を見てみたいですわ。太白さんと戦うところ、観戦したいですわ！」

女性の斬刀士、“スパイラル”の加入メンバーである千鶴（ちづる）は賛同する。

彼女の外見は一言で言って、蠱惑的（こわくてき）な印象を受ける。緑色のリボンで可愛く結った灰色髪の短いツインテールをしていて、比較的身長が高く推定百六十六ｃｍ、長い腕と、短いヒールをつけた白い靴から青い短パンまでの脚を惜ししげも無く露わにし、服の上からでも大きく膨らむ胸を白いタンクトップで覆っている。スタイルが良く見た目は十代後半。美しい顔立ちで、薄い口紅を塗ってある大人な女性だった。

傍目から見ても目立つ装いだった。だが、派手さは無い。色っぽくありながら、それでいて清楚さと気品を感じさせる雰囲気が漂っている。彼女の中身と外見を合わさったその元気な空気は、人に好印象を与えるだろう。

彼女は、エイン達創設メンバーとは別の、創設されて後に“スパイラル”に加入した、外部からのメンバーである。

迷いなく頷いた千鶴は、新人である魔導士に振り向いた。

「貴方もそう思うでしょ、レザート君？」

「……え？　……あ、はい。そう、思いま、す……」と、レザートなる魔導士はそう頷いた。

消え入りそうな声で、緊張しているのか微妙なところで言葉を切るその魔導士は十三、四歳の少年だ。

名はレザート。ブラウンの髪とインテリメガネをかけているので理知的そうだが、子供顔なのである意味では可愛らしい少年だ。魔導士が着る紫のローブと首に赤のスカーフを巻く、先日入ったばかりの新人である。つまり、千鶴の後輩にあたる。

まるで誘導尋問のように、よく考えず頷いたレザートだったが、エインにとっては痛恨の一撃に思われた。

（……何だこれは？　これでは自分はまるで四面楚歌な状況ではないか。　後輩がアリーナ出場に反対しない以上、最早自分が反対する最大の理由がない……）

否、よく思い返せばまだ反対の理由は残っていた。ＰＫを促進するアリーナには出たくないという理由がある。それがあるかぎり賛同はしない、とエイン。

だが、それを見計らったように、ガイヤが口を開く。

「それに、エリア作成ならもしかしたらそのエリアだけＰｖＰできない仕様にできるかもな」

――――終わった。

ガイヤの一言で、自分の柱が勢いよく崩れ去る音が頭の中で反響した。まさか、こんな攻撃で自分の城門が簡単に突破されようとは。友人というのはつくづく恐ろしい、とエイン。

改めて彼は、付き合いが長いと何もかも見透かされてしまうな、と思いつつレザートに向かって声を飛ばした。

「レザート！」

「……はっ……い……？」

「今日と明日、そして依頼に時間を割けない時はこのギルドは休業だ。理由は諸事情でっということに」

「……は……！？」

「羽目はずして、冒険など試合観戦など自由にしてていい。ああ、

勿論、時間ができたらギルド運営再開するつもりだから、その時はそろそろ君を任務に参加させようかな。何時再開になるか分からないけど」

最早、彼はヤケクソだった。

ただ思いつくままに、早口で述べていく。

「試合のない日はいつでも呼んで構わんから。……時間が許す限り冒険へ一緒に行こうと思う」

メンバー全員がエインの言葉の意味を理解し、@Ｈｏｍｅ内に歓声が轟いた。

「よっしぁ！　それじゃあ、今から試合登録しに行くか！」

ガイヤが勢いよく先導し、全員は「おー！」と発した。

エインは友人のペースに乗せられたことに後悔しつつもしかし、嫌な顔一つせずにそれに続いた。

＊　＊　＊　＊　＊

一方――

「タルタルガ」　@Ｈｏｍｅ地区

――「『鳳天宮』に出ましょう！」

そう、ガイヤと全く同じ事を主張するＰＣが別サーバーにいた。
ここは初心者支援ギルド“カナード”の@Ｈｏｍｅである。その規模は上級ギルドが使うランクの@Ｈｏｍｅと変わりなく、豪華な仕様を誇っていた。
“カナード”の@Ｈｏｍｅは、不思議な場所に設置してある。
――「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」であって、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」ではない場所。不法ＡＩが集まる移動要塞型ルートタウン、「タルタルガ」。ここでは、システム管理者からの介入も、その他様々な異常事態にも影響されない、仕様にない空間である。一般から設立されたこのギルドがその「タルタルガ」に存在するのは、ここを統治するギルドマスターの知り合いであるハッカーが勝手に“カナード”の@Ｈｏｍｅをここに移したからだ。
それでも、メンバーは特に文句などはなく、逆に馴染み始めている。

そんな中、突然入ってきて、いきなりアリーナに出ようと主張してきたのは、“カナード”メンバーの一人だ。
緑のキャミソールドレスに、レース飾りのついたカボチャパンツ、長手袋に膝上のストッキングを穿いている。小鳥のような羽飾りが肩から背中に伸びている。白い大きい帽子を被り、金髪で琥珀色の瞳をした、いかにも礼儀正しそうな呪療士の少女。
彼女の目の前には、“カナード”のメンバーであるシラバスとガスパーと話し込んでいた、ここのギルドのマスターが立っていた。
白を基調とした服を着て、奇妙な近未来的な装飾品をつけている。それらに同化したような白銀の髪。背中からリングの装飾品をつけ、そこから七本の棒が取り付けられている。
どう見ても、あらかじめ用意されたＰＣエディットではない。だが不正規とも違う、なにか不思議な感じがするＰＣエディットだった。赤い目がギラギラ光る少年ベースのＰＣ。彼の職業は錬装士。
アリーナ三連覇を無敗で成し遂げた、現「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」

では知らぬ者はいないほどの知名度を誇る最強ＰＣと噂される人物だ。そして、当事者以外は誰も知らないが、数ヶ月前この「Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」の危機を救った英雄の一人でもある。
少年ＰＣはシラバスとガスパーが話し込んでいた時に、新たな友人が現れ、そう主張してきた彼女に驚いていた。

「いきなり現れて、急にどうしたんだ？　アトリ」

アトリとは彼の目の前にいる呪療士の少女の名前だ。
少女は興奮しているのか、高ぶった声を抑えきれず続ける。

「昨日、メールが届きました。今度、アリーナで『鳳天宮』というのが開催されるというのをご存知ですよね、ハセヲさん？」

彼女が呼ぶハセヲというのは“カナード”のギルドマスター、目の前にいる少年のことだ。

「……ああ。そういえば、昨日届いたな」

もちろん、ハセヲにもそのメールは来ている。優勝者にはエリア一つ自由に作れる権利を与えられるとか。

「で？　それがどうしたんだよ？」
「だから、その『鳳天宮』に出ましょうって言ってるんです」

アトリは改めてそう主張した。
驚きを隠せないハセヲ。普段、ＰｖＰを嫌っているアトリが自主的にアリーナに出ようと自分から言ったことなんて、今まで一度もなかったからだ。

「……マジで？」
「マジです」
即答だ。
本当にその意思はあるようだった。
「な、何で急に？　お前、望んでアリーナに出ようなんて、今まで一度もなかっただろ？」
どういう風の吹き回しだ、という風にハセヲは動揺しながらアトリに尋ねる。
「そうですよ。今でも、ＰＫは嫌いですけど、今回は別です！　私、このアリーナに出場して、エリ……いえ、優勝したいんです！」
こいつ、なにか変なものでも食ったのかと一瞬思うハセヲ。
どうしてここまでアトリが熱くなるのか、全く見当がつかない。
今までこの少女を見てきたが、優勝してチャンピオンにつきたいという性格（タマ）じゃない。かといって、ただＰｖＰがしたいとか目立ちたいというのも、先ほどのアトリの言葉で明らかに違う。
――――ならば何か？
残されているのは、今回優勝者に与えられる商品、エリア作成権。
アトリが優勝したい動機はこれしか思いつかない。
故にハセヲは確認をとる。
「まさかお前、エリアを作成したいから、このアリーナを？」と、ハセヲ。
アトリが、彼の問いは心中を見透かされたものと驚き、また喜びを露わにした。

「あ、よく分かりましたね！　さすがハセヲさん！」
「お前が考えそうなことはすぐ分かるからな」

ハセヲはアトリから顔を背け、ギルドの倉庫を確認する。それ以上彼女に構う気はゼロだった。
アトリといえば、馬鹿にされたような気がして、頬を膨らませた。

「むぅ～、なんですか。その私がその程度しか考えられないみたいな言い方は～」
「そう聞こえたなら謝るが、お前がエリアの景色を好むことはよく知ってるからな。普通にそう考えるだろ？」
「……ん～、そうですよね。さすが、ハセヲさん！　よく分かってるじゃないですか！　流石私達、以心伝心の恋仲ですね～」と、アトリが笑顔でそう言った。

満足そうに言う彼女に、ハセヲの耳は聞き捨てならない言葉に反応する。

「ちょっと待て！　今、最後何って言った！？」

ハセヲは倉庫の確認を忘れて、かなり動揺した様子でアトリに振り返る。

「え？　あぁ……熱々になるくらいの『恋仲』ですね～って言ったんですよ？　そういうことじゃないんですか？」
「そういう風に言ったつもりはねえ！　つーか、前に言った台詞と微妙に違うぜ！？」
「まあ、まあハセヲ！　そう恥ずかしがらずに」と、横槍を入れるシラバス。

「恥ずかしがってねえ！　変に勘違いすんな！　つーか、何でシラバスまで加わってんだよ！？」
「え、恥ずかしかったんですか？　もう……。そうならそうと言ってくださいよ、ハセヲさん」

ぽっ、と頬を赤く染め、片手でそれを隠すようなモーションをするアトリ。

「だから違うって言ってるだろ！　あぁ、マジで疲れるからもうやめてくれ……」

ハセヲはわずかな願いを込めて、がっくりと頭を落とした。
その願いを聞きうけたのかそうでないのかわからないが、シラバスがわざとらしく咳きをする。

「コホン。まあ、冗談はさておき……」
「冗談かよ！」と、ハセヲはツッコミを入れた。しかしシラバスは、その言葉を馬耳東風と無視。
「なんでアトリちゃんはアリーナで優勝して、エリア作成権を手に入れたいの？」
「そうだぞぉ～。この『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』には、綺麗なところはまだまだいっぱいあるんだぞぉ～」

ガスパーも同意する。
アトリはしばらく何かを考える仕草をした。そして訳もなく落ち着きなさそうにモジモジと僅かにくねらせる。

「えっと、それはですね、その……やっぱり、自分が理想とする景色を作りたいなって思って。その、ハセヲさんとのデー……いえいえ、あの、大切な人との思い出にできたらなって」

なんか途中で気になる部分もあった気がする、とハセヲ。見ると、彼女は挙動不審だ。
だが、彼はそのことを深く考えず完全スルーする。

「そうか。……まあ、お前はそういうの聞くと作りたくなるよな。例えば、雪景色とか、自分の思い通りに描いた綺麗な場所とか、山とか浜辺とか。『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』には無い、ただ一つの場所を作る――――いいんじゃないか？　がんばれよ」

端的に話を終えて、彼は今日の計画を確認し始める。

「シラバス、悪いけど、これを出品してくれないか？　あと、これと、これ。頼む」
「分かった」
「ガスパー、大変だと思うけど、出来るか？」
「うん、まかせてぇ～。オイラ、がんばるんだぞぉ～」
「ありがとうな」

相棒であるシラバスとガスパーの二人に、ハセヲははにかむように笑った。
その時、アトリはようやく状況を判断し、重大なことに気づいたようだ。

「……ん？　あれ、あれ？　え？　え？　あ、あの？　ハセヲさん？　……もうお話は終わりですか？」

いつの間にか、話題が変わり、アリーナに関する話が終わっていたのをようやく悟る。
アトリは慌てた様子でハセヲに尋ねた。

ハセヲは至極興味ない口調で答える。
「何でだ？　だって、出場メンバーは決まっているんだろ？　だったら俺は関係な――――」
「何言っているんですか！？　ハセヲさんも一緒ですよ」
「はぁ！？」
アトリの意外な単語に、勢いよくハセヲが振り返る。
「ハセヲさんがいなければ、何がアリーナ三連覇した『ハセヲチーム』といえるんですか！　当然、リーダーであるハセヲさんもご一緒です」
――――何故か勝手にメンバーに数えられちゃってるよ、俺！
心中で突っ込むハセヲ。だが、彼は心の中で終わらせるような性格ではない。
「何勝手に……。それに、アリーナに出る気なんてさらさらねえよ。面倒だし」
「そんなこと無いですよ。だって、メールに書いてあったじゃないですか。私達が出場登録するなら、宮皇特例として最高位のシード枠を与えるって」
「――――げっ！」
やっぱり届いていたか、とハセヲの表情は青ざめた。
アトリとは一緒によくアリーナに出ていた。正式メンバーとして認識され送られたんだろう、とハセヲ。
実は、ハセヲチームが特別にシード枠が用意されることになっているのは、リーダーでもある当のハセヲも知っていた。彼は「鳳天宮」お知らせメールの他に、新たなメールを受け取っている。

＊

送信者　ＣＣ社
件名　シード枠について

ハセヲ様

平素より「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をご愛顧頂き、誠に有難うございます。
この度、新闘宮「鳳天宮（ほうてんきゅう）」の開催をお知らせいたしましたが、「紅魔宮」、「碧聖宮」、「竜賢宮」の三連覇無敗を成し遂げられたハセヲチームには、出場される場合、特別に無条件で最高位のシード枠をご用意させていただきます。
出場される場合は、出来る限り速やかに選手登録をお済ませください。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
万一、このメールにお心当たりの無い場合は、お手数ですが、弊社カスタマーセンターまでご連絡ください。

＊

確かに最高位のシード枠、これ以上にない好条件でのスタートである。
だが、それでもハセヲは一蹴（いっしゅう）するつもりでいた。
「どう言われても、俺は出ない。そんなのは時間の無駄だ」

「どうしてですか？　仮にも、『紅魔宮』、『碧聖宮』、『竜賢宮』の宮皇になったハセヲさんが新闘宮制覇という四階級無敗制覇は皆さん期待しているんですよ！　出なかったら、ハセヲさんの伝説が壊れちゃいますよ？」と、アトリは両腕を上下に思いっきり揺らす。
「伝説ってなんだよ。作らんでいい。……それに、『紅魔宮』、『碧聖宮』、『竜賢宮』に出たのはそれなりの事情があったからだ。別に出たくて出たわけじゃねえよ」

ハセヲは事実、過去の出場は望んだものではなかった。
三階級の周辺に凶悪なコンピュータウィルス――――ＡＩＤＡの関連性が指摘されたからだ。
そのための調査、ＡＩＤＡ駆逐に出たのだ。宮皇になりたくて出たわけではない。
――――ハセヲは先の事件で、ＡＩＤＡの駆除に奔走していた時期がある。とある目的にＡＩＤＡが関係していると考え、情報を得られれば、と出場した。
そして今はもうＡＩＤＡはいない。全ての事は、数ヶ月前に解決している。ＡＩＤＡが関係していない闘宮に出ても時間の無駄と考えているのだ。元より観客の見せ物になるのを嫌っているハセヲにとっては、出たくないのも当然のことだ。

「そういう事情があったことは、お前も分かってるだろ？」
「うっ……。それはそうですけど。でも、ここまで関わったんですよ？　最後まで関わりぬくというのがないんですか？」

それでもアトリは食いしばる。
こんなときに限って食いついてくるのは何故だ、とハセヲは訝しみながら溜息混じりに答える。
「それとこれとは意味が違う。それに、あまりＰＫとか人より強く

なるのを嫌っていたのはお前だろ？　だったら、自分の言葉に責任を持て。俺は何が何でも出ないぞ」

そこでアトリは「あっ」と自分の失態に気づいたように、口元に手を当てた。

それ以上、彼女から言葉は出てこない。

ハセヲが自分のＰＫ嫌いの意見を受け入れて、それを信条としている。彼女にとっては自分の言葉を受け入れてくれたことが、とても嬉しいことなのだが、いまはそれが墓穴を掘っていたのだ。

だから、これ以上反論は出来ないでいた。

「俺は、お前のために言ってるんだ。残念だが、諦めろ」

「……そ、そんなぁ～。そこをなんとかぁ～、ハセヲさぁ～ん」

しまいには泣きついてくる。よほど自分の信条を曲げてまで、そのエリア作成権が欲しいらしい、と思える。

だからと言って乱暴に振り払う事が出来ず、ハセヲは泣くなよ、と窘めている状態が続く中、@Ｈｏｍｅの入り口から新たな声が上がった。

「こら、ハセヲ。女の子を泣かせちゃ、駄目だよ」

その声に、ハセヲとアトリが振り返る。

穏やかな女性の声だった。彼らの目の前には呪療士の少女が立っている。その姿は非常にアトリに似ているデザイン。いや、同じといったほうがいい。ＰＣグラフィックの色を除けば。

ハセヲの昔からの知り合いで、彼が“カナード”に関わる前、彼女と同じギルドに属していた頃からの顔なじみ。彼女の立ち振る舞

いは、外見が似ているアトリとは似ても似つかない清楚な印象。
アトリと並ぶと姉妹のように見える程そっくりで、はじめ後から知り合ったアトリを見た時は、ハセヲは彼女だと勘違いしたほどだ。
彼女は銀髪で衣装は黒く染まっている。帽子も黒だった。そして、唯一、彼女とアトリが区別できる目印として、左目の下には涙のような小さな紋様があった。

「し、志乃！？」
「志乃さん！」

志乃と呼ばれた呪療士の少女はゆっくりと階段を下りて、穏やかそうな、にこやかな顔で彼らの傍に近寄った。

「最初聞いたときはまさかと思ったけど……。ハセヲって結構女の子、泣かすほうなんだね」

何か勘違いしてると、直感で感じたハセヲは思わず口を開く。

「そ、そうじゃないんだ、志乃。実は……」
「うわぁ～ん、そうなんですぅ～」

アトリがいきなり志乃に駆け寄り、ハセヲの言葉を遮った。
しかも、誤解を招きそうな言動まで入れているところに抜かりはない。

「な！？」

思わぬアトリの行動に驚くハセヲ。
彼の反応も目にくれず、アトリは志乃の胸に飛び込んで、泣きじゃくる。

「私、私、もうどうしたらいいのか、分からなくて、もう、志乃さんしか……」
「泣かないで、アトリさん。どうしたの？　わけを説明して」
志乃がアトリの頭を撫でながら、彼女を慰める。
その光景をハセヲはただ見ていることしかできなかった。
（なんか、とんでもないことになってるんだけど……誰か教えてくれないか？）
彼は心の中で見えない何かに訴えた。運命、という相手にだろうか。
――はっきり言って、無理だろう。
アトリが最初から事情を説明する。それを静かに聞く志乃。緊張しながら二人を見つめるハセヲ。それらを静観するシラバスとガスパー。
一通り事情を話し終わると、志乃は浅いため息をついた。
「そう。そんなことがあったの……？」
コクンとアトリが頷いた。
ハセヲはなんとか、誤解を解こうと思って、志乃に自分の意見を言う。
「――だ、だからさ、志乃。別にチャンピオンになる理由もないし、今回は……」
しかし、志乃はそれを遮るように、にこやかな顔でこうアトリに助言する。

「大丈夫よ、アトリさん。ハセヲはまだ子供で時々素直じゃないけど、意思はしっかり持つ強い男の子だから。それに、女の子には優しいからもっと迫れば、ハセヲは『うん』しか言わなくなるよ。きっと」
「な！？」

志乃の思いがけない言葉に驚愕するハセヲ。

「そうなんですか？」とアトリ。
「そうよ。私のときもハセヲはちょっと意地っ張りだけど、最後はちゃんと私のことを考えてくれてる素敵な人なんだから。アトリさんを含めて、女性の味方なんだから、安心なさい」

――――な、何を言ってるんだ志乃！？　そんな風に考えてくれてたなんて嬉しいけど、今は切ないのは何故だろうか、と思うハセヲ。
狼狽しているのは隠しきれないハセヲは、それでも理由を答えようとする。

「だ、だけど、志乃。俺の、俺達の目的は――――」
「分かってるよ、ハセヲ」

みなまで言わせず、志乃はハセヲが何を言いたいかは、ちゃんと理解している。
彼女は諭すように続ける。

「だからこそ、今は気分転換も必要じゃないかな？　ハセヲが毎日、エリア中を駆け巡ってることも、それが誰のためかも。ちゃんと知ってる。でもね、時にはちょっと立ち止まって違う景色を見るのも結構いいものなんだよ？」

ハセヲは驚いた。
志乃がまさかこういうとは、と。いや、本当はこれが正しい彼女かもしれない。
彼はそう思うと返す言葉も無い。
「貴方は今、本当はどんなに強くて、優しくて、そしてどんなに弱いかも、ちゃんと分かってる」
私はずっと見ていたから、と。
「志乃……」
志乃を見つめるハセヲ。
黒い呪療士もハセヲを見つめ返す。
「だから、素直でありなさい。ハセヲ、誰かのために走るのはいいけど、たまには遅れて走る人と一緒に走ることをしなさい」
まるで、姉から説教されているように。志乃は微笑みを浮かべて正面から自分の考えを主張した。
それをハセヲは、不思議と怒りなども悲しみなども感じない。むしろ、彼にとって一番気づかなきゃいけないことだった。
無言の彼に、志乃は告げる。
「だから、アリーナに出なさい。女の子のお願いはちゃんと聞くものだぞ。泣かせるなんて言語道断。……ね？」
そう言って、軽くウィンクした。
その言葉にハセヲはどうしようもなく納得させられる。いつも彼

女は諭すように言いきって、人を惹きつける。だからこそ、昔所属していたギルドのサブリーダーに近い立場にいることができたのだろう、と。
なんだか、志乃のペースに乗せられたみたいに少し釈然としないハセヲ。
「志乃の気持ちは分かるけど、けど俺は宮皇にはもう……」
執着は無い、と答えようとした。
そこへ、追撃の如くアトリがハセヲの顔に迫ってきた。真剣な気持ちを伝えようと、彼の両手を握りしめる。
「お願いします、ハセヲさん！　私と一緒に、アリーナに出てください！　是非。是非！」
「わ、分かった！　お前と一緒にアリーナに出てやるから、迫るな！」
彼は慌てて、アトリを押し返した。
「ありがとうございます、ハセヲさん！」
押し返されながらもアトリは深く、何度も頭を下げた。
ハセヲはおぅ、と視線を逸らしながら引きつった笑みを浮かべている。
望みの結果に志乃は、アトリに祝辞を送る。
「良かったね、アトリさん」
「はい！　志乃さん、ありがとうございます！」
ハセヲはアトリと志乃が喜ぶ姿を見て、改めて女性に強く言われ

ると断れない自分を自覚させられた。
そんな彼がしょんぼりするところを見て、志乃は微笑みながら隣に立つ。
そして、ハセヲの耳元にこう囁く。
「心配しないで。貴方の気持ちは分かってる。ありがとう、ハセヲ……。アリーナ、全試合見るから、頑張ってね。私は、貴方が素敵な大人に成長する姿を見てみたいから」
「し、志乃！？」
「ふふ……」

ハセヲは志乃が顔を近づけて、そんなことを言ったので、顔を赤くしてしまった。
アトリは喜びいっぱいで我を忘れたように飛んではしゃいでいる。
シラバスとガスパーもその光景は何度見てもこの場を和ませている、と思い見守っていた。

結論として、ハセヲチームは復活し、第四の闘宮出場が決定された。
だが、その為の問題は山積みだった。
「さて、問題はメンバーだが、俺とアトリは決まりとして、他に誰かいないか？」
「ごめんね、今は大学とかが色々と忙しくて無理なんだ」
志乃が手を当てて、謝る。
彼女のリアルは大学生だが、先の「ＡＩＤＡ事件」の際、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイ中に原因不明の意識不明者の中に名を残

してしまった女性だ。
数ヶ月前の電子災害――――第三次ネットワーククライシス終息の直後に意識を取り戻し、今は大学への復学の準備と休学していた間の補講やら研修やらで忙しい状態だという。
「そうか、志乃は仕方ないな。シラバス、どうだ？」
ハセヲは頷いて、シラバスに尋ねる。彼はアリーナの出場経験も何度かあり、ある程度実力も期待できる人物だ。
だが、青年の首は横に振られた。
「ごめん。ボクも無理なんだ。今度、単位取得のための大事な試験があるんだ。せっかくの誘いだけど……」
シラバスのリアルも大学生。
優秀な大学に在学しているそうで、勉学の方もこなさなければならない彼にとって試験は重要な課題だ。
「成る程、それは重要だな。ってか、俺は中間試験、昨日終えてるからいいが。アトリ、お前そろそろ中間試験とかがあるんじゃないのか？」
何気ないハセヲの言葉に、アトリは声を詰まらせる。
「うっ……。それはその……試験はもう少し先なので大丈夫ですよ。試験期間はアリーナ期間と重なりますけどね。えへへ」
アトリは何気なく冷や汗をかいているように見える。試験勉強とかしてなくて、やばいと気づいたのだろうか。

「まあ、大丈夫ならいいが。ちゃんと勉強はしろよ。留年したくなけりゃな」
「留年！！？」
留年と聞いてショックを受けるアトリ。急に錆びついたロボットと化する。
やはり、それほど成績は悪いのだろうか、とハセヲは僅かに心配する。
「こら。ハセヲ、言いすぎだよ。ちなみに私は誰かさんが半年も遅刻したから、既に留年の身なんだけど？」
志乃がちょっと鋭い目をして、ハセヲを見つめる。
「うっ……悪い」
精一杯の謝罪の気持ちでハセヲは頭を下げる。
顔を上げて、今度は獣人のメンバーに視線を向ける。
「ガスパーは……無理だな。やっぱ……」
「うん、ごめんよぉ～」
先ほどのハセヲの様に、ガスパーも申し訳なく答えた。
ガスパーは極度の上がり症で、アリーナなどの人が多いところに立つと、緊張して動けなくなってしまう。それは今でも改善されていない。出場したら、それはそれで本末転倒である。
自覚しているガスパーは、それ故に自ら出場辞退を申し出る。
“カナード”からのアテが無くなったハセヲはメンバーアドレス表を一通り見回してみる。
知り合いは今、殆どＯＦＦＬＩＮＥ状態で相談する相手はなかな

かいない。
その中に、揺光という名のＰＣが表示されている。ＯＮＬＩＮＥ状態だ。
一瞬、誘ってみようと考えたが、まだリアルの彼女は入院中なのに、こういうアリーナに興味を示すんだろうかと悩む。
それは最近、揺光本人から聞かされたものだ。例の「ＡＩＤＡ事件」際、志乃と同じく意識不明に巻き込まれた彼女は同じ時期に回復したものの、身体のほうがまだ自由に動かせる状況じゃなく、リハリビのためしばらくの間入院を余儀なくされたのだ、と。
――それに、あいつにはイコロの仲間がいる。
もし、出るんだったら、天狼や太白と一緒に出るかもしれないし、アトリとの間でまた険悪な雰囲気になったら困るかなと、一時保留にしておく。

「……そうか。じゃあ、どうするんだよ？　二人でも出場できるが、相手は無論三人で来る。こちらも三人揃えないと厳しい戦いになるぜ？」

そう言った時、思い出したのか不意にシラバスが口を開いた。
「だったら、クーンさんはどうかな？　クーンさんなら、何度もハセヲとアリーナに出てるし、大丈夫だと思うんだけど」
「そうだぁ～、クーンさんなら、ハセヲのいいパートナーになれるぞぉ～」
「クーンか……。そうだな、ちょっと連絡してみるな」

クーンは元“カナード”のギルドマスターだった銃戦士だ。ハセヲの仲間で、今は“レイブン”というギルドに所属している。
ハセヲはクーンにショートメールを送る。
彼からの返事は直ぐに帰ってきた。

『アリーナか。エリア作成権とシード枠いうのもいい話だな。分かった。……だが、今、カノジョとデート中なんだ。選手登録は代わりに済ませておいてくれ。じゃあな』

またネットナンパか、懲りないな……まあ、元より軽薄なクーンらしいからいいことだな、とハセヲは内心苦笑しながら思った。

「ＯＫだそうだ。先に登録してくれだってさ」
「さすが、クーンさんだぞぉ～」
「メンバーは揃ったね」
「これで、アリーナに出れますね、ハセヲさん！」
「それじゃあ、今から登録に行きましょうか？」

志乃の言葉に従い、ハセヲ達は五人揃って、@Ｈｏｍｅから退出し、ルミナ・クロスへと向かう。

WORD21？　新たなる闘地　「鳳天宮」（後書き）

はい。作者の蒼雷のユウです。

初めてこの作品に触れた方はようこそ♪

前にここで読み、再び来られた方は気付いたでしょう。はい、携帯で読む人の為に、さらに分けている事に気づかれたかと思います。それでもまだ長いのでしょうけれど、携帯派の方はまだ読みにくいという事でしたら、いつでも知らせてください。

エイン達、そして原作主役であったハセヲ達の思惑が「鳳天宮」という道で交差しようとしていますね。いつ頃交わるのかは、それはその時まで楽しみにしててください。

次回、後半？はもう一組を交り合わせ、登録する内容です。

ＷＯＲＤ２ｌ？　新たなる闘地　「鳳天宮」（前書き）

※この物語は、ＰＳ２用ソフト「．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．」本編から数カ月後の世界が舞台です。初めて．ｈａｃｋの世界に触れる方の為に、随時解説を入れておりますが、物語の都合上、本編のネタばれ要素が入っています。．ｈａｃｋの世界をゲームで楽しみたいと考えている方は、ゲームを先にプレイするのをお勧めします。

　また、この作品は過去某サイトで投稿したものを加筆修正、改稿したものです。（そのサイトの管理者から許可は得ています）

WORD2ー？　新たなる闘地　「鳳天宮」

WORD2　新たなる闘地　「鳳天宮」

Σルートタウン　双天都市「ブレグ・エポナ」

エインとハセヲがアリーナ出場に説得されている同時刻。

遥か天空に聳(そび)える空中都市は近代的で、そこだけが別世界のように広がっている。街並みを見下ろせる位置に張っているロープウェイが便利な交通手段としている、人間族が神々の街「曙光の都アーセル・レイ」に近付くために建設された街、という設定。それがLV100以上の上級者が入場を許されるこの双天都市「ブレグ・エポナ」である。

きまびらやかな装備品を着けた冒険者が行き来する表通りから離れた、人通りが殆どない裏路地に一人の男が立っていた。空中都市としてそびえたこの都市のさらなる上、天空を見上げていた。

男は紫を基調とした服に、その上に白いコートを羽織っている。中年男性のような白い髭と髪をして顔に傷跡があった。渋いダディズムのような男だ。

男の名は太白。「竜賢宮」の宮皇であり、“イコロ”のギルドマスターを務めていた男だった。だが、現在はその座は奪われ元チャンピオンとして、一プレイヤーとして存在していた。

今はアリーナのチャンピオンには執着はなく、全く興味などは無い。まるで、何時奪われてもいいように覚悟していたようだった。そのために、“イコロ”に@Homeに自らがいる資格などは無く、

普段から、人気の無いこの場所に留まって、空を見上げることが日課だった。
既に自身が「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をプレイする目的だった、「ある種の脳に対する影響力」の調査は終えており、そろそろ引退しようと太白は思っていた。
――――太白のリアルは日本で有数の腕を持つ脳外科医。最近は日本の高度成長化に伴い、患者の数が増加したため、各地に飛び回ることが多くなってきた。その理由により、アリーナに出る機会も少なくなったため、丁度いいと思っていた。
しかし、彼の心の中で何かがぽっかりと穴が空いた気分に駆られ、いまだ辞める気にはなれなかった。
それでアリーナに出ずに、この場所で心の整理をしようと訪れているのである。

「――――太白～」

遠くから彼の名を呼ぶものがいた。太白が振り向くと、二人のＰＣが駆け寄ってきた。
一人は人間型の女性ＰＣ。赤髪で布地の服を纏い、ズボンも同じ素材だ。全体的に黒を強調している服である。お腹を大胆に露出した快活な少女だ。
もう一人は獣人ＰＣ。全体的に狼が人間型に進化したような姿だ。誇り高そうな強い野性味の顔つきにレザーのズボンを履いていた。

「天狼、揺光か……」

少女が揺光、獣人が天狼と呼んだ。
二人は“イコロ”に所属していた元宮皇達だ。そして、太白とも同期のギルドメンバーである。

「やっと見つけたよ。全く、どこにいるのかと思ったら、こんなところにいたのか」と、遥光が少し息をつきながら口を開く。「なんで、こんなところにいるんだよ？」
「少々な……君たちには、関係あるまい」

そう、太白はまた空を見上げる。
揺光は彼の言葉に納得できず、声を荒げて反論する。

「関係あるさ！　アタシ達は仲間だからだろ」
「――――」

揺光がそう言うと、太白は見上げたまま何も答えない。代わりに、こう返す。

「そういう君達はなぜここに？」

その質問に対して天狼が前に出る。

「お前を探していたんだ、太白」
「私を……？」

自分を探していたと、太白は顔を天狼たちに向ける。

「何故だね？」
「太白、俺達と共に『鳳天宮』に出てくれないか？」

彼らが発した言葉は意外なことだった。
太白が何かを発する前に天狼が続きを語る。

「今回のアリーナは三人出場でないと、勝ち目は薄い。だから太白、

俺達と共に大会に出て欲しい」
「理由は？」
「……優勝したいと言わなければ嘘になるな。だが、俺はお前と共に優勝したい。どうしても」
「――――」

太白は目を瞑り、思案するように佇立（ちょりつ）する。
何かを思い出すように空へと顔を向ける天狼は重々しく、だが本心からの言葉を発する。

「先の化け物退治の時、俺達は共闘しあった。そして俺は気づいた。あの時まで俺は、仲間という存在を拒絶してきたかを。俺は、『竜賢宮』のＰＫトーナメントの際、ＡＩＤＡ（アイダ）という黒い点によって変わった禍々しい剣に魅せられた、お前の目を覚ましたいと思った。何故かは分からぬ。――――その前には俺があの力を魅せられそれを欲したし、この力さえあれば、俺は永久に宮皇の座でいられると。そう思っていたが、この力によって揺光が意識不明になったことを聞いたとき、俺は戦慄（おのの）いた。改めてこの力の強大さと凶暴さを実感させられたのだ。俺は、あの力が恐ろしくなった。
だからお前まで、俺のように、揺光のようになって欲しくないと思った。だから、リスクを承知でお前を止めるために『竜賢宮』に出場した。だが、俺一人では無理だった。一人では先には進めなかった。一人では……お前を救えなかった」
「――――」

天狼はあの時の心境を胸に手を当て、口を開く。

「化け物退治の時、俺と揺光の意識も戻り、お前の目も覚まされたと知ったとき、俺は歓喜に溢れた。あの力を欲したときより、ずっとな。そして、化け物相手に俺は全く怖気づいたわけではなかった

が、お前達と共に戦えたことに俺はそんな恐怖すらを無くしてくれたのだ」

仲間とは、共に戦う者はいいものだ、気付かせてくれたと。

太白は前を向いて、静かに目を閉じながら天狼の話を聞いている。目じりを指で拭く揺光。

「だから俺は、お前達と共に、『鳳天宮』にでて優勝し、今では錆びれてしまった“イコロ”の誇りを取り戻したい。お前達と共に、“イコロ”にいたいとそう思っている。今度はお互いに潰しあうのではなく、共に競い合う友として」

天狼の言葉に頷く揺光。そして、彼の話は終え、後は太白の返事を待つ。

しばらくの間、太白は何も言わなかったが、やがて口を開く。

「君達の気持ちは分かった。だが、私はその願いを聞き入れることは出来ない」

「――――っ、何故だ？」

「私には、最早宮皇の座に興味も執着も無い。私は、この世界にいる理由を遂げたからだ。いずれ、私はこの世界を去るだろう。去るものに名誉も地位も必要ない。だから、無理なのだ」

「っ……。『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』を引退するのか、太白？」

引退すると聞いて驚く揺光。

「そうなるな……」

「ならばせめて、俺達と一緒にイコロに」と、天狼。

「君達は変わった。だから、私がいなくてもやってゆける。私の後は、“イコロ”のマスターは天狼、キミに譲る。私にはアリーナに

出る理由はもうないのだ」

そう言って、太白は二人が見つける前の状態に、また空へと顔を向けた。

「二人とも、礼を言う」

太白はまた天へ見上げた。まるでその姿は、大事な恋人が天へ召されたときに悲しむように。表情は何時も通りだが、普段から彼に接している者から見れば、憂(うれ)いに満ちた表情だった。

その姿に我慢できなくなった揺光は太白の前で仁王立ちになる。

「――――情けないね、大の大人の男がさ！　そうやってうじうじ考えてるからいけないんじゃないの？　そもそも、子供じゃあるまいし、大人ならそういうの、びしっと物事を決めるもんじゃないの！？　アタシの尊敬する大人はそういう人なんだけどさ、だからって、アンタみたいな大人が子供になったみたいに、黄昏(たそがれ)てるんじゃないよ！　だいたい、やめるっていうなら、素直にさっさとやめればいいじゃないか！　別にリアルまで干渉はしないけどさ。それをしないってことはまだこの世界に未練があるってことだろ？　今のアンタは何かを亡くしたみたいにとても悲しそうだよ。だったら、そのなくしたものを埋めるために行動するほうがいいじゃないのかい？　ただ、空眺めて考えたってなにも解決しない！」

去るなら未練を失くしたほうがいいだろ、と。

メッセージウィンドウを埋め尽くすほどの、激昂(げっこう)した揺光の言葉に太白はポカンとさせられた。

（これは、説教というものなのか？）

太白はそう頭に過った。

生まれたころから頭が良く、数々の英才教育を受けて、ちやほや

された。飛び級で優秀大学の医学部を卒業し、周囲から尊敬の的であった太白のプレイヤーにとって今まで、見ず知らずの他人に説教されたことは無かった。
今、太白のプレイヤーは他人である揺光のプレイヤーに説教されている。
無論彼女は、彼が有数の腕を持つ外科医だというとは露(つゆ)とも知らない。だが、知ったところでなにも彼女は動揺など、他の者達と同じく尊敬することも無く、変わらないだろう。彼女はそういう女だからだ。
太白は生まれて初めて他人に説教を受けて、戸惑いを隠せずにいた。

「まったく……それにほら、これ、受け取りな」

揺光は太白にプレゼント画面であるものを渡す。

――――諒銃剣(りょうじゅうけんななかまど)・七竈を手に入れた！

そう、太白のグラフィックに表示された。
揺光から渡されたのは銃剣だった。アップデートの際、レベル上限上げに伴い、装備品も一新されている。
七竈はその中でも上質の武器だった。

「なんだね、これは？」
「見ての通り、アンタの新しい武器さ。冒険中に偶然、手に入れてさ。あたし達じゃ使えないから、あんたにあげようと思って。……感謝しなよ？　ちゃんと、カスタマイズもしてあるしさ」

七竈には既にカスタマイズが施されている。ＳＰ５０％ドレインと業炎攻撃が既に付加されていた。恐らく、揺光が自腹で使ったの

だろう。

「違う、そういう意味ではない……。何故これを私に渡す？」

そう、太白が尋ねる。

しかし、揺光はその質問には答えず、逆に別の質問で返す。

「ねえ、太白。その銃剣、七竈の花言葉、知ってるか？」

「花言葉……」

というと、七竈は花の名からきているのだろう。七竈は太白も聞き覚えがある。山地でよく目にする落葉高木で、初夏には枝先に径六～十ｃｍの丸くまとまった白い花が見られると聞く。果実も美しく、九～十月には直径五～六ｍｍで球形の果実が赤く熟するといわれている花だ。

しかし、そういうことは知っていても、彼は花言葉まで興味が無いので全く知らないのだった。

揺光は静かに深呼吸すると、小さく、太白に聞こえるように伝えた。

「七竈の花言葉はね、――――『内に秘めた情熱』」

「……」

太白はその言葉に、無視できないところを感じていた。

そんな揺光は少女らしい花言葉の意味を知っている趣味を持ち合わせているのか、と彼は思ったのだが。

実際、彼女は昔はそんなロマンチックな趣味を持ってはいなかった。

――――前に、ライバルでありながら最も信頼する仲間のハセヲに、

あるエリアで双剣・忍冬をプレゼントしたときに、その忍冬はおろか、他の花の花言葉を彼女は全然知らなかった。
その花の名を持つ忍冬をハセヲが受け取ったとき、その花の花言葉を口にする。――――「愛の絆」と。
そのことを知らなかった当時の揺光は赤っ恥をかいたように、顔を赤くしていた。そのころだったか、彼女がハセヲに特別な感情を抱き始めたのは。
後、学校の図書館で花辞典をかたっぱしから漁っていたことを揺光は覚えている。無論、本を散らかすなと図書委員長から怒られたことも。
あの時から、誰かにアイテムを渡すときは、必ず花言葉を調べることが、揺光にとっての日課であった。
無論、太白の銃剣も事前に調べて、渡している――――。

「アンタはいつも、まわりに冷たく振舞ってるけど、本当は内に情熱を秘めてる男だと思ったからさ。今は、何かを亡くして、情熱を失ってるように見えている。アタシはあの頃のような、太白に戻って欲しいんだ。情熱を秘めていた、あの頃のあんたにさ」

そう言って、太白の胸に軽く拳を叩く。

「その銃剣を渡したのは、そういう思いがあったからさ。どうせ去るなら、情熱を取り戻してから、去りな。そうすれば、あたし達もなにも言わないからさ」

にっ、と快活に笑う少女。
太白は心中で驚いた。
揺光が「紅魔宮」チャンピオンになってイコロに入り、太白に会ってからわずか数ヶ月の間に、そこまで見抜いていたとは思わなかったからだ。

確かに、あの頃の太白は内に情熱を秘め、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」を調査とともに楽しんでいた。しかし、しばらくしてから「イコロ」の存在意義を見出せず、情熱を失いかけたこともあった。
だがそれを、この少女は容易く見抜いていたのだ。
彼が考えながら手に取った銃剣を見下ろしていると、天狼が揺光の隣に立った。

「まったく、驚いたぞ。急に冒険に付き合ってくれといわれて、何周回もダンジョンに行き、深夜になってやっとこの銃剣を手に入れ、それが太白のためと聞いたときはな」

地雷だったのだろう、揺光が怒った顔で天狼に振り返る。

「こら、天狼！　一言多いんだよ、お前は！　どうして、アンタはそういう思いやりに欠けるんだ！　そういうのが無いから、どうせ女にモテないんだろ？」
「何を言う！　ちゃんと職場でも、女にモテてるぞ！　身長高いとか唯我独尊（ゆいがどくそん）などで、告白もされたこともある！　それに、これでも、思いやりを思って言ってるんだ！」
「はっ、唯我独尊？　口にするとカッコいいけど、一人身の男がよくいう台詞だね！　それで？　告白の返事はどうしたんだい？」と、ニヤリ顔の揺光。
「それは……断ったが、何しろ俺は今……」

天狼が何かを言おうとした途端、揺光がそれを遮る。

「ほぉら、どうせ告白してきたのは、好みのタイプじゃなかったんだろ？　思いやりに欠けるから、美人にどんどん逃げられるんだぁ～」
「そうではない！　ちゃんと俺なりに思いやりを持っている！　ど

うして分からんのだ！　馬鹿ではないのか？」
「なにおぉ～！　デリカシーに欠けるのはそっちだろ！？　文句あるのか！」

急に、天狼と揺光が痴話喧嘩（ちわげんか）を繰り広げた。さらにメッセージウィンドウが罵詈雑言（ばりぞうごん）で埋め尽くされていく。
太白は銃剣と揺光、天狼を見比べると、思わず「フッ……」と、小さく笑ってしまった。

「あっ、太白、今笑った！　笑っただろ！？」

揺光がターゲットを天狼から太白に変える。
だが太白は冷静に受け流した。

「全く、こんな物のために、諦めもせずダンジョンを回り、あまつさえ、私に説教をするとはな……。変わらないな、揺光。その中身の性格は」

まるで何も知らぬ子供のようだ、と。
揺光と天狼を見つめる。

「ふーん、悪かったね。どうせ、子供ですよ」

逆鱗（げきりん）に触れたのだろう、揺光は顔をプイッと背けた。
彼女はそう言ったが、太白の考えは違った。外見と性格は子供でも、心は既に大人なのだろう。もしかしたら、自分より大人びているかもしれないと思っていた。

「そうだな、私は調査のために、ここにいた……。そして、それ以外の感情を持ち合わせないと思っていた。その内に、心の中で熱い

ものが芽生え、このゲーム、『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』をやっていた。……だが、その調査自体も行き詰ったとき、情熱は冷め始めていた。そして、完全に情熱が冷めたのは、あの化け物退治の後からだった。だが、一瞬でも私は、その時に心の熱いものが最高潮に達したのだ。どうしてか。それは、お前達と共に『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』を守りたかったかもしれぬ。……それが終わったとき、協力する機会も無くなった私に、何かを失くしたように心に虚(うつろ)が出来た。それがなんなのか分からぬまま、この場所から空を眺めていた。だが、お前達が失くした物がなんなのか教えてくれた。気づかせてくれたな。そうだな、そうだった……忘れていたよ……」

そう言って、彼は銃剣を取り出す。そして、軽く振った。

「私の内に秘めた情熱も、なかなか美しい」

七竈の姿は、黒く鈍色に光っており、バスターブレードの形をしている。剣の中心には、赤い小さな宝玉が埋め込まれている。剣状の上には小さく細い銃口があった。その姿はさながらショットガンのようだ。外見は剣の温度は冷たい姿だが、内なる力はどれだけの熱さを誇るのだろうか。

まるで、太白が持つべき銃剣、むしろそれ自体が半身のようだった。

「よかろう。アリーナの件、喜んで引き受ける」

太白は銃剣を仕舞うと、揺光と天狼に向かって、はっきりとそう答えた。

その言葉に、二人は驚きを隠せず、最初は動揺した。

「ほ、本当か！？　俺達と一緒に、『鳳天宮』に出てくれるのか？」

「ああ。苦労して、手に入れたこの剣を渡されて、断れんよ。それに……」

天狼はさっき、深夜になって銃剣を手に入れたと言っていた。ならば、二人のプレイヤーは相当無理をしているはずだ。

人の健康を預かる一人の医者として、人間として、無視は出来ない。

「だが、アリーナまでだ。登録したら、ゆっくり寝なさい。これは忠告だ。……出るなら、優勝するつもりでいく。いいな……？」

太白はそう言って、動き出す。二人の間を通って、メインストリートへの道へ向かう。

二人は呆然としていたが、その言葉が、自分達を気遣ってくれていることと、彼の強い意思が込められていることが分かり、勢いよく振り返った。

『はいっ』

二人は同時に返事し、太白についていった。

＊＊＊＊＊

Ωルートタウン　闘宮都市「ルミナ・クロス」

闘争都市ルミナ・クロスはショーアップされた無国籍風（むこくせきふう）の街なみであった。主にＰＫを好むＰＣが集う場所で、たまに態度のでかいＰＣがうろついている。

その名の通り、対人対戦を中心に設定された街で、公式対戦「アリーナ」が設置している。ここでは、今まで育てたＰＣと他者のＰＣと戦い合う事が出来る場所だ。
しかし今日、注目度が高いアリーナ「鳳天宮」の開催に様々なＰＣが行き来していた。

「鳳天宮」出場登録をしに来たエイン達は、その受付を窓口にて申請をしていた。

「はい、受付完了しました。正式にトーナメント選抜の報告は後ほど、メールにてお知らせいたします。メールをお待ちください」

受付嬢が受付完了をしたことを確認すると、軽くお辞儀をした。

「よっし、登録完了っと。後は、選抜されるのを待つだけだな」

ガイヤが笑みを浮かべたまま振り返る。

「まあ、今回は恐らく、出場グループは少ないと思うよ。計六十二チーム参加可能なわけだし、ＬＶ百五十を超えているＰＣなんてそうそういないし、抽選になっても、選抜される可能性は高いから」

エイン達は後ろに待ってる人がいたので、早めに列から外れる。
そのまま、近くに人がいないスペースに陣を構える。今後の行動を話し合うことになった。

「さて、適正ＬＶ百五十以上だが、最低でも、百七十五以上はしないとまずいよな」
「そうだねぇ～」

ガイヤがあっけらかんと頷く。
ＬＶ百七十五はアリーナ制限ＬＶの半分のＬＶだ。強くも無く弱くも無くという感じである。
上級アリーナランカーは少なくともＬＶ百七十五以上で出場してくるだろう。彼らも試合前に、ＬＶＵＰをしなければならない。
今のＰＴの平均ＬＶは百六十五だ。あとＬＶ十は彼らには必要だった。

「じゃあ、とりあえず選抜されるのを待つとするか。それまでは、各自自由行動。ＬＶＵＰに行ってよし、他のアリーナ出場者を見に行ってよし、だな」

エインが今後の予定と今の時間を確認する。今は午後の九時だ。
――案内メールが来てから、約二十時間後だ。そろそろ、ある程度の人数は揃ってくるだろう。

「そうね、ＬＶＵＰしたとしても、選抜されてなければ意味はないから。でも、そうであったとしても、それはそれでいいよね」
「まあな」

ナミの意見にガイヤは賛同する。だが、彼は困惑に続けた。

「エインの言うとおり、自由行動っつってもな。どうすりゃいいんだか……」

迷うところだろう。
一刻も早くＬＶは上げたいが、あまり調子に乗りすぎて、ネトゲ中毒や疲れて心身に負担をかけることはしたくはないのだろう。自分達は学生の身分である以上、健康には気を使わなければならない。リアルあってのゲームだから。

だからといって、ただ選抜を待つというのも気が引けるのだが――。
そう思い悩んでいる時に、エインがふと、カオスゲートを見た。
「ん……？」
エインが振り返った先には、カオスゲートで転送時の光が発していた。光に包まれた人らしき輪郭（りんかく）は消えて失せた。
よく輪郭は見えなかったが、五人くらいはいただろうか、とエインが考えた時。
「おい、大ニュース、大ニュース！」
エイン達の隣にいたグループの中に一人のＰＣが慌てて、中に入り、ボイスチャットで声を発していた。
彼らは近くにいるので、聞くことが出来る。
「さっき、アリーナ受付で『鳳天宮』の登録していたらさ、見ちまったんだよ。あいつも出るらしいぞ！」
「あいつってだれだよ？」
「ハセヲだよ！　ハセヲ。『死の恐怖』の」
「え、マジかよ！　アリーナ三連覇したあの？」
「そうだよ！　あの『死の恐怖』ハセヲが、『鳳天宮』に出るらしいぞ！」
「おい、マジ情報か、それ！？」
「ああ、マジマジ」
「嘘だろ～。一回戦からあたりたくねぇ～」
「それがさ、ハセヲチームは特別にシード枠が用意されるってよ！」
「マジか！？　よっしゃぁ。しょっぱなからやられないですむぜ！」
「だとしたらさ、やっぱり今回も達成する気なんじゃね？　伝説の

無敗四連覇！」
「そしたら、歴史に残るな。絶対」
「ハセヲって、仲間多いんだよな。参ったな、対策練られないじゃねえか」
「奴らの初戦相手が、俺達じゃねえことを祈るばかりだな」
彼らがそう話しているのを一言残さず、エイン達は聞いた、いや、聞いてしまったのか。
「どうやら……」
「あんまりのんびりってわけには……」
「行かないみたいだな」

三人全員が強張った表情で見合わせる。
エイン達は今の話を聞いて、なんとしてでもアリーナ第二回戦までに、ＬＶ百七十五にならなければいけない、と考えた。
――「死の恐怖」の異名を持つ、ハセヲの名は聞き及んでいる。初出場ながらアリーナを次々と突破し、無敗で三階級を制覇した、現、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」では最強のＰＣだ。その知名度は度々ニュースでも持ち上がり、その強さは常人を遥かに超える存在だとされている。シード枠があたえられることは当然のことだろう。
どこのシードになるかは分からないが、最低でも運次第では二回戦であたることになる。
その前に、なんとしてもある程度のＬＶは必要だと考えた。
エインは全員に向かって、口を開く。

「ハセヲの強さは皆も分かってるよな？　あの強さは凄い。正直、俺達のＬＶがハセヲたちより上じゃないと勝機は薄い。当たるときはＬＶはどれくらいか分からないが、彼らもＬＶ百七十五以上で来るのは確実だ。やはり、選抜前にある程度、ＬＶは上げておかない

と……」
「そうだよね、私達が強くなってる間に、相手も無論強くなる。気を引き締めないと」と、顎に手を当ててナミが同意する。
「あの太白と榊を倒したんだから、相当強いんだろうな。おそらく、優勝狙ってくるぜ」と、ガイヤ。

エインは榊という単語を聞いて、ビクッと身体を振るわせる。
――榊とは、エイン達が所属していた月の樹の二番隊隊長であり、崩壊の原因であるＰＣだった。
あのクーデターの後、「竜賢宮」で特別ディレクターになって、ＰＫトーナメントを開催し、トーナメントに出場していたハセヲに嫌味などをぶつけ、「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」から消し去ろうとしていた。あの時の榊は禍々しく変貌しており、周囲は「彼は大魔王」とか言っていた者もいた。
タイトルマッチもその異変ぶりを発揮し、乱入したりなど誰がどう見ても、ハセヲになにか恨みでもあるのかと言うぐらいな程だった。
最後は、その姿を忽然と消し、以来誰も見たことは無い。
噂では、榊を特別ディレクターに推進したＣＣ社が彼のＩＤごとＰＣを取り消したということだったが、榊のプレイヤー関連自体はなんら情報がなかったのだが――と言う話だ。何故かエインにその試合を見た記憶は無く、偶然観戦していたガイヤから聞いたことだった。
エインはふと右手を見ると、いつの間にか強く握り拳を作っていた。慌ててその手を開けた、その時。

「お、おい！　あれを見ろ！」

ガイヤが急にカオスゲートに向かって指を指した。全員が振り返ると、誰かが転送されてくるのが見えた。

その輪郭がはっきり見え始めたころ、周囲がざわめいた。

「た、太白だ！」

「それに、天狼と揺光もいるぞ！」

転送されてきたのは、各闘宮の宮皇だけが所属の資格を得られるギルド“イコロ”のメンバー、太白と天狼、揺光だった。

過去三人全員“イコロ”に所属していた彼らは威風堂々と歩き出す。

「まさか、『鳳天宮』に出場する気か！」

「しかも三人で！？」

“イコロ”のフルメンバーか……強敵だな」

いつの間にか、ルミナ・クロスにいた全員が太白たちに注目する。

太白達は彼らの視線を気にすることなく、受付へ向かう。三人はエイン達の横を通り過ぎる。

エインはその瞬間、目を太白に向けた。動きはスローのように見える。ゆっくりと彼を視界におさめる。自分だけ、脳内がスローモーションのように、王者の姿はゆったりとした足取りで、それが一分間ぐらいに感じられた。

（この威圧感――――まさに、王者の風格……！）

そう、エインは思ったという。

＊＊＊＊＊

Λ「厳選する　鼓動の　情緒」

ルミナ・クロスの騒ぎから一時間して、エイン達はエリアで冒険を行っていた。
既に三周ぐらいはしている彼らは、三回目のそのエリアのボスと戦闘を行っていた。
その相手は四足歩行の巨大な肉食生物である。その獰猛（どうもう）な爪から繰り出される薙ぎ払いは、多くの冒険者の身体を内蔵ごと抉り取られかねない一撃だ。だが、その強力な爪攻撃の前には大ぶりな攻撃モーションがある。それさえ読み取って退避すれば、直撃は逃れられる。
エインはそのボスの右腕が上げられた瞬間に、銃剣による袈裟斬りを止め、高速で後退。爪攻撃は完全に回避する。
攻撃後の隙を狙ったように、ガイヤが双剣を持ちて肉薄する。斬斬、と絶え間ない二十斬撃が放たれる。
紫のリングがボスの身体に出現する。レンゲキ可能なエフェクトだ。
狙い、エインがアーツを発動して、完全に敵のＨＰを削り取った。

「よっし、倒したぜっ」

ガイヤがボスの身体が消失した事で、戦闘が終了した事を認識した。経験値を獲得し、ガイヤのＰＣレベルがアップする。
同じくナミもレベルが上がり、満足そうな顔で今日も締めくくろうとした。

「それじゃあ、ＬＶ上げもこれくらいにして、そろそろ落ちましょうか。もう十一時だから私、落ちないと」
「そうだな、だいぶ上がったし」

ガイヤとナミが共に武器を仕舞う。
彼ら三人のＬＶはそれぞれ三上がり、大きい収穫だ。あれから一

時間でこれだけレベルアップしたという事は、彼らがどれだけ早く、集中してレベルを上げていたか理解できる。
が、エインは納得いかなげに返事はしなかった。

「……」

「ん？　どうしたの、エイン？　元気なさそうだね？」

ナミがエインの異変に気づき、声をかける。それで彼は我に返ったように慌てて返事をした。
彼はルミナ・クロスで太白が通り過ぎてから、ずっとこの調子である。

「え、そうかな？　そうでもないと思うけど……」

エインはそう言って適等にはぐらかす。
まだ元気があるというのは嘘ではないが、彼は太白と同じアリーナに出る事に緊張と、そしてまだ早かったのではないかという後悔が渦巻いている。

「ひょっとして、今さらながらに太白を怖くなったとか？」

前に回り込んだガイヤが言った。
まるで見当違いの答えに、エインは眉を潜めて、

「なんだよそれ！　そんなんじゃないよ！」

怒ったように言った。
彼のその様子を見て、ガイヤは小さく笑う。

「そうだよな～。あのエインが怖くなったなんてこと無いよな～」

エインの肩を軽くポン、と叩いた。陽気にニカリと笑みを見せた彼は転送装置に向かって歩き出した。

「全く……」

エインは不機嫌そうであるがしかし、溜息を吐いてその様子を消し、彼の背中を見つめる。

そこにナミが近づいて、彼に声をかける。

「まあまあ。……あれでもガイヤは心配してるんだよ？」

「……ああ、分かってるよ。俺を元気づけようとして、ポジティブに考えさせようとしてああ言う事を言ったと思うから」

「そうなんだ」

ガイヤは自分を励ますために言ったつもりなのだろう。全く素直じゃないな、とエインは苦笑いを浮かべた。

遠慮なく言ってくれた、そのことが何よりも嬉しいことだと彼は思った。

「……戻るか。もう夜、遅いし」

「そうだね」

二人は急いで、ガイヤの後を追っていった。

＊＊＊

Λルートタウン　「マク・アヌ新市街」

「――――。……よし、千鶴とレザートには連絡はしたよ。“『今日はもう遅いから解散。また明日』”って伝えた」

エインがショートメールで二人のメンバーに解散を知らせ、振り返った。

二人には自由行動をさせている為、この場にはいない。千鶴は買い物に行っており、レザートは自主的にアリーナのシステムについて詳しく調べる為に攻略サイトで閲覧している。用事が終われば大抵@Ｈｏｍｅに戻るのだが、このままエイン達は落ちるので、二人にも連絡は入れて戻る必要はないと知らせたのである。

ガイヤとナミはようやく今日は終えられる憂いを晴らしたように、力強く頷き返した。

「じゃあ、また明日」

「ああ。選抜されるといいな」

「うん。じゃあお休み」

ガイヤとナミは同時にログアウトする。

エインもログアウトを開始した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エインのプレイヤーである新二はＭ２Ｄが停止したことを確認した。ディスプレイには「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」のメニューがある。

新二はＱｕｉｔを選択して「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」を出た時、メールが届く。

「ＣＣ社かな？　いやに早いな……」

＊

送信者　ＣＣ社
題名　「鳳天宮」選抜について

　エイン様

平素より「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」をご愛顧頂き、誠に有難うございます。
お客様は、アリーナ「鳳天宮」におけるトーナメントの参加者として選抜されました。
トーナメントへの参加を承認なさる場合は、「ルミナ・クロス」のアリーナカウンターにて、現在より二十四時間後までに本登録を行ってください。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
万一、このメールにお心当たりの無い場合は、お手数ですが、弊社カスタマーセンターまでご連絡ください。

＊

「すっげーあっさり選抜通った……いくらなんでも早いと思うが。……。……まあ、いいか。明日からＬＶ上げだ」
新二は特に深く考えず、そのままコンピューターをシャットダウンし、部屋を出て寝る支度を整えに向かう。
――しかし、彼らはまだ気づいていなかった。このメールが運

命の序章への招待状だということに……。

To be continued……

ＷＯＲＤ２ー？　新たなる闘地　「鳳天宮」（後書き）

次回予告

大会への招待状。それは、運命の序章と人の夢。彼らとの出会いのきっかけ。そして、少年の心は彼らと運命によって突き動かされる。

闘地に向けて、三人は鍛錬を重ねる。そして、少年は友人の誘いを受け、依頼を受ける。それは不思議なゲーム。

プレイヤーはまた新たな文字を入力する。

Ｗｏｒｄ　３　不思議な「依頼の」

不思議な依頼をする者に、どうか幸せを……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

どうも、作者の蒼雷のユウです。

第二話ですね、大分．ｈａｃｋらしさが生まれたと思います。
原作キャラが今のところ主役ではないですし、出番もまだまだ少ないですけれど、いつかは機会も増えていくと思います。
さて、特訓編が次回です。アリーナ出場の為に、エイン達はＬＶＵＰするために、戦います。質の良いバトルが提供できれば、幸せです♪
皆さまの心が、この作品から奏でられる調律によって響く事を祈りつつ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6600k/

.hack//G.U. Reunion

2010年10月14日12時58分発行